

終章 結論および今後の課題

終一 1 本論文の総括および結論

(1) 本論文の総括

以上本論文では、序章で本研究の意義および論文の構成を示した後に、第1章で「我が国の観光レクリエーションを巡る状況」を、総論的にとりまとめた。具体的には我が国のライフスタイルの実情および、ライフスタイルにおける余暇の位置づけについて考察を行い、多様な観光レクリエーションを考慮した場合に森林管理面からどのようなことに配慮すべきであるか問題点を整理した。

その結果、我が国の観光レクリエーションを巡る現状は、

- ①我が国では国民の生活の力点が、レジャー・余暇生活へとはっきり移っていること。ただし、労働時間の偏りのため、世代間・男女間の格差は未だ解消されていない点も留意しながら将来に向けた計画を立てる必要があること。
- ②生活の力点が置かれるレジャー・余暇生活の中でも、野外活動に対する潜在的欲求が高いという傾向が出ているが、直接森林とふれあう活動や欧米型の森林レクリエーション活動のすべてが、必ずしも我が国に定着しているかという点と若干疑問が残ること。
- ③我が国は人生80年時代に入っており、このような社会は世界のどこにも経験していない状況であり、そのような社会におけるレジャー・余暇生活の計画も確立していないということ。
- ④勤労世代においても余暇時間が確実に増加しているため、このような世代に対する成人層への日常的な余暇空間の提供も重要であること。

などに、まとめられた。

また、第1章の後半では、我が国で行われる観光レクリエーションの動向を、既存の統計資料をもとにとりまとめた。そして、森林との関わりから、我が国で行われる観光レクリエーション活動のトレンド分析を行った。

そして、森林に関わる観光レクリエーションに関わる既存統計を、モントリオールプロセスの基準と指標にあわせる形でとりまとめ、考察を行った。その結果、「農林業センサス」や「森林の多面的機能調査 森林・施設状況調査」など複数の既存統計資料が存在し、「観光レクリエーションに関わる「森林面積」や「施設」、「利用者数」などの現状をある程度把握することが可能であった。

しかしながら、「森林面積」を除くデータの信頼性は必ずしも高いとはいえない状況にあることが明らかになった。また、本論で検討している幅広い観光レクリエーション活動を考慮した統計というよりは、直接森林を利用するような狭義の「森林観光レクリエーション」に関わる統計が主体的であった。

以上、総括すると、我が国に現存する森林に関係した観光レクリエーションの統計は、必ずしも少なくはないのであるが、本論文で検討しようとしている「観光レクリエーションのための森林管理」を考えるための指針として利用するには、必ずしも十分とはいえない状況にあった。加えて、十分ではない統計情報に加えて、観光レクリエーションはかくあるべきという国家レベルの哲学が確立されていないため、我が国ではそれぞれの行政分

野が緊密な連携を持たないまま施策を行なう状態が続いており（大井1991）、国民の観光レクリエーションのトレンドを的確に踏まえた上で、将来の森林像を計画する体系が、現在の我が国では確立されているとは言い難い状況といえた。

我が国では、2001（平成13）年の森林・林業基本法の制定及び森林法の改正によって、従来の木材生産中心から、多面的機能を効果的に発揮するための森林管理へと方針が転換された（林野庁2002）。そして、森林の多面的機能を効果的に発揮させるため、個々の機能について個別に明確な根拠を示した上で森林管理を行う必要がある。多面的機能の1つに位置づけられている観光レクリエーション機能についてもこの状況が当てはまる。つまり、観光レクリエーション機能を適正に発揮させるための森林管理の方向性について明確な根拠を整える必要がある。そのための一環として、我が国における観光レクリエーションのトレンドを客観的に分析し、その成果を現実の森林管理へ効果的に反映させるしくみを整えるための考察を行った。

そして、現在我が国では、観光レクリエーションと森林との関わりを継続的に調査している事例がいくつか散見できないことはない。例えば、旧総理府は、過去1年間に森や山などに入った経験などを尋ねる世論調査を、1976（昭和51）年以降ほぼ5年ごとに調査していた（総理府内閣総理大臣官房広報室 1996）。しかし、この調査は抽象的な設問が多いため、調査結果をもとに、多様な活動内容から構成される観光レクリエーション活動に対する森林管理の方向性を具体的に導くことは難しかった。

また、10年ごとに公表される世界農林業センサスでは、1990（平成2）年版から観光レクリエーション等に供される森林の面積や、森林に関係の深い観光レクリエーション施設の数などを統計の対象とし始めた（田中1997）。そして、その統計を用いた分析が、既にいくつか行われていた（餅田1992、林2001）。しかしながら、センサス統計は時系列的な蓄積が未だ十分でないため、大半はトレンド分析を行うまでには至っていないのが現状で、林野施策に関係して社会的問題として採りあげられた事象を時系列的に整理してセンサスの結果と対応させた事例が見られる程度であった（土屋2002）。また、センサス統計の対象となった項目数は、上述の旧総理府の調査と同様に、幅広い観光レクリエーションの全体像を理解するためには十分であるとは言い難い点が指摘できた。翻って、我が国におけるこの様な状況とは対照的に、余暇活動を充実させるためのトレンド研究は、欧米のいくつかの国ではかねてより盛んに行われていることを指摘した。

我が国でも、将来的には、欧米の様に個別の観光レクリエーション活動や、地域の自然的・社会的特性ごとにトレンドを調査・分析し、その結果を踏まえて将来の森林計画のあり方について検討を行う必要があると考えられるが、その様なトレンド研究自体の蓄積が皆無に近く、第3章で述べたとおり、オートキャンプを対象としたトレンド分析（Ito1994）などの研究事例がcaろうじて見られるのみであった。そのため、我が国の観光レクリエーションのトレンドを見据えて森林管理を考察するにあたっては、まずはその先駆けとなる研究を開始するよりしかたがないと考えられた。

そのためさらに、レジャー白書を用い、観光レクリエーション活動のトレンドを森林管理の観点から総論的に考察した結果、①森林利用のタイプと余暇活動のトレンド類型との関係および②森林利用のタイプと活動への平均参加率と間の関係は非常に多様であること、そして③余暇活動のトレンド類型との平均参加率との間には一定の関係が一部示唆さ

れるものの全般的には非常に多様であることなどが明らかになった。

以上、森林管理上留意すべき観光レクリエーションを活動別にとらえ、そのトレンドを分析すると、非常に多様であるということが定量的に示された。したがって、今後森林の多面的機能を効果的に発揮させるために観光レクリエーション活動を考慮するにあたっては、この多様な関係を前提に踏まえながら、観光レクリエーションのトレンドを個別継続的に分析する必要があると判断された。

しかしながら、現行の森林計画制度などでは、この様な多様な我が国の観光レクリエーション活動の現状をきめ細かく念頭に置いて森林管理を行うような体系になっていないと考えられた。この状況を改善していくためには、我が国の観光レクリエーションのトレンドを個別継続的に分析した結果を用いて、観光レクリエーションのためによりきめの細かい森林管理体系を確立し、実際の森林計画へ反映させる仕組みを確立する必要があると結論づけられた。

続いて、第2章で、我が国の観光レクリエーションに関わる森林管理について国土利用計画の中における特徴を整理するとともに、明治期以降の行政施策の特徴を時系列的にとりまとめ、我が国の森林計画管理における観光レクリエーションの実態や知見について考察を行った。

その結果、明治維新により近代的森林管理が幕開け、大正期に保護林の誕生など観光レクリエーション施策が安定をみせて、昭和戦前期には観光レクリエーションの絶頂期を見せたものの第二次世界大戦による中断を余儀なくされたこと。そして、戦後になって、1940年代半ばから1950年代後半にかけては林政そのものの復興にあてられたため、森林観光レクリエーション行政の胎動が見られたのは、終戦からしばらく間をおいた1950年代後半から1960年代半ばにかけてであったこと。さらに、1960年代半ばから後半にかけて、国有林を中心に、総合的な森林観光レクリエーション施策の基盤が整備されていき、1970年代から1980年代半ばにかけては、国有林、民有林を問わずに森林観光レクリエーション施策の展開が見られるようになったこと。そして、1980年代後半からは、バブル期における民間主導の開発型の施策、不況期における非開発型の施策と様相を変化させながらも、森林観光レクリエーション施策の著しい多様化が行われるようになったことが明らかになった。

しかし、林野施策全般の中における観光レクリエーション施策は、明治期後半には、既に林野施策としては、木材生産の副次的位置づけに定められた感があり、戦後も1964（昭和39）年の「林業基本法」の制定に見られるとおり、木材生産を中心とした林野施策システムが完成し、制度的には木材生産型を中心に添えた林野行政が行われた現実は否定できなかった。

ただし、その間一貫して、一般国民の森林を活用した観光レクリエーションの気運は高く、明治期から始まったアルピニズムやスキー、植物採集などが広く浸透したため、林野庁としては、外圧的な要因から観光レクリエーションに配慮した施策を行わなくてはならない状況が生じたと考えられた。

林野の内発的な動向としては、明治期の保安林制定や大正期の保護林の制定など、独自

に観光レクリエーションのために森林管理施策を展開した場合もあるが、昭和の国立公園制度や、1966（昭和41）年の科学技術庁による勧告、1987（昭和62）年のリゾート法など、他省庁に端を発する観光レクリエーションの動向に対応する形での施策の展開が比較的多く、地域全体を考慮した観光レクリエーション施策、あるいはランドスケープ構造を考慮した施策の展開になっているとは言い難かった。つまり、計画性を高く意識して内発的に施策が行われていると言うよりは、むしろ外圧に基づく対応型の施策スタイルが多いという状況が、20世紀いっぱい続いたと考えたほうが自然であると考えられた。

第3章では、我が国の観光レクリエーションに関わる森林管理について研究面から時系列的にとりまとめ、我が国の森林計画管理における観光レクリエーションの実態や知見について考察を行った。

その結果、終戦から1960年代前半にかけては、散発的にしか行われなかった観光レクリエーションに関する研究は、1960年代後半の自然休養林に関わる研究を皮切りにまとまって行われるようになったといえることを明らかにした。つまり、我が国の林学分野における戦後の観光レクリエーションに関わる森林管理の研究は、現実に行われた林野施策に対する対応型研究をきっかけにまとまって行われるようになったと考えられる。

このような施策対応型の研究は、保健保安林の配備基本計画を行い、その積極的利用と造成を検討するために1970年代初期に開始された森林の保健保全機能に関わる多面的機能の研究や、1970年代半ばには各地で県民の森などが設定され始めたことに対応して開始された県民の森や森林公園などの運営管理に関わる研究、1980年代に入り観光レクリエーションに関わる林野施策が多様化しことに対応して開始された森林観光レクリエーションに関わる林野施策に関する研究、1980年代後半から1990年代のバブル景気からその後のバブル崩壊かけての各種リゾート施策に対応して行われるようになったリゾートブーム下の森林観光レクリエーションに関する研究などが見られる。このような状況を考察すると、我が国における施策対応型の観光レクリエーションに関わる森林管理の研究はおしなべて施策後追い型の研究を余儀なくされてきたと考えられる。そのため、今後の研究においては、施策提案型の研究を、如何に進めるのが重要な課題であると考えられた。

また、1960年代の後半には既に山村地域の総合的観光レクリエーションに関する研究が開始されて、単に森林のみを研究対象とするのではなく、森林、山岳、湖沼などを総括的にとらえた山村を研究対象にとり、そこで展開される観光諸現象を調査研究する必要性が主張されていた。つまり、木材生産や林地のみに縛られない形での、山村における産業としての観光レクリエーションの重要性は、既にこの時期から唱えられていたことが分かる。しかし、この類の研究はその後散発的に行われてはいるものの、いずれも指摘のレベルにとどまっていて、総合的な観光レクリエーションを現実に展開するための森林管理に関する具体的な研究を踏み出す研究まで昇華しているとはいえない状況にあった。

1970年代初期になると、森林の開発にともない、観光レクリエーション資源としての森林に対する注目が集まるようになり、いくつかの研究が始められた、その先駆けが都市地域・都市住民の森林観光レクリエーションに関わる研究である。この研究では、都市における緑の減少を踏まえて、都市住民の観光レクリエーション林に対する意識や実際の利用

行動などについて調査が行われ、効果的な都市近郊レクリエーション林のあり方が模索された。そして1980年代半ばには一時沈静化を見せたものの1980年代後半のバブル景気による乱開発を背景に再び、この類の研究が脚光を浴びるようになっていった。また、1980年代に入ると、さらに自然保護に対する世論が高まったことをうけて、都市域に限らず、一般的な自然地域の保全と森林観光レクリエーションとの関係を考察した自然の保全と森林観光レクリエーションに関わる研究へと研究が展開していった。

また、戦前から行われていた森林の風致施業に関する研究が、まとまった形で行われるようになったのも1970年の初期からである。風致施業の研究は、当初は風致の維持を目的とした森林における更新や植栽などの実施結果を考察した研究が主流であったが、1980年代の前半には、観光レクリエーションのための林床植生のあり方に対して活発な論議が展開され始めた。そして、1990年代に入ると、風致施業に関わる研究は、純粋な植物の管理論に加えて、人間の森林利用という点を考慮した上での論議へと変革を遂げていった。

1970年代の半ばからは、観光レクリエーション林の中に存在する人工物、つまり森林観光レクリエーション地域の施設や備品に関わる研究に目が向けられるようになってきた。

研究対象として挙げられたのは、当初はくず入れや解説版、擬木などの小施設であったが1980年前後からは、観光レクリエーション林に関わる道、つまりサイクリング道やアクセス道におけるサイン、林道、遊歩道などの研究や、建築物施設に関する研究も見られるようになっていった。

同じく1970年代の半ばには、観光レクリエーション機能の地理的解析・地帯区分などに関わる研究が行われ始めた。地理的解析・地帯区分に関わる研究は、1970年代の半ばには公益的機能の一環として研究が行われる場面が多かったが、1980年代に入り、森林公園など、具体的な観光レクリエーション林を対象とした森林の地帯区分へと研究のテーマが移っていった。そして、1980年代の後半にはいると、今度は再び観光レクリエーションに特化した形での広域スケールの地理的解析が展開されるようになっていったと考えられる。しかしながら、そのような研究の推移はあったものの、現実の森林計画に適用させることを意識した研究をあまり見ることができなかつたことも事実である。

さらに、1970年代半ばに、特に活発となってきた議論が、観光レクリエーションを通じた地域活性化に関わる研究である。この類の研究は、宮林をはじめとする東京農業大学の林政学を専攻する研究グループを中心に積極的な研究が行われてきた。この研究では、森林の厚生的機能の評価とは、森林における観光レクリエーションの生産性を可能な限り定量化し、活動を経済評価することであるとし、それにより木材生産利用とは違う「厚生林業」という新たなカテゴリーを確立すべきであるという理念から開始されている。そして内発的発展や地域主義の思想など念頭に、各地で経済的、社会的に無理のない地域活性化のあり方に関する検討が多数行われている。

なお、観光レクリエーションに関わる地域活性化の研究は、1980年代の後半頃には上述のリゾートブーム下の森林観光レクリエーションに関する研究へと関心が集中した。しかし、1990年代の初めにバブル経済の雲行きが怪しくなった頃から、地域活性化そのものの議論が再び見られるようになった。この時代も、東京農業大学の研究グループを筆頭に、内発的な地域活性化の議論や、森林総合利用の議論、過疎化対策として観光レクリエーションのあり方、都市山村交流の検討など多彩な議論が見られた。このように、この分野の

研究は、現在においても非常に盛んであり、今後の林野施策としても非常に注目されている。ただ、我が国の観光レクリエーションのための森林管理の研究の全体像から考えると、この類の研究が突出しておこなっているため、序章から再三述べている多様な観光レクリエーション活動を念頭においた研究がやや手薄になっているという副作用の存在も否めない。

1980年代に行われるようになった研究としては、まず森林観光レクリエーションに関わる海外調査研究が挙げられる。この類の研究については、既に1953（昭和28）年に中村の研究が見られるなど起源は古いが、まとまった研究成果が見られるようになったのは、日本の経済が安定し、海外調査が比較的手軽に行えるようになったこの時期であり、対象地もアジア、ヨーロッパ、北米など多様化し、日米や日韓などの国際比較研究も見られるようになった。

そして、1980年代には、森林観光レクリエーション地の利用者に関する研究が主体的に行われるようになった。それ以前にも、自然休養林の研究や都市地域の森林観光レクリエーションの研究に関連して、利用者の研究が行われた事例は少なくないが、この時期になって、利用者に対する研究そのものが研究のメインテーマとなった。この類の研究は、その後、1990年代に入りパーソナルコンピュータの普及および高速化が急速に進んだために、それまで簡単に行えなかった定量的な森林空間に対する心理的、生理的な調査研究へと発展した。また、利用に関する個別具体的な研究を行うために、登山、オートキャンプ、溪流釣り、キノコ採りなどの森林に関わる観光レクリエーション種目に関する個別的研究が行われ始めた。そして、1990年代の後半には、観光レクリエーション的側面から、森林の療養およびユニバーサルデザインに関する研究が行われるようになった。さらに付け加えると、1990年代には、利用者の側面からの研究だけでなく、森林の所有者・管理者・地域住民などからみた観光レクリエーションに関する研究が行われ始めたことも注目に値する。

また、森林観光レクリエーション地や施策の歴史的発展過程に関する研究が行われるようになったのも1980年代である。この研究には、交通資本による観光開発の展開過程、日光地域の野外レクリエーション利用の変遷に関する研究、近世・明治期における温泉地の空間構造に着目した研究など、即地的な研究が見られる一方で、国有林の観光レクリエーション事業の展開過程など、施策の歴史を取りまとめた研究や、韓国と日本における2国間比較を通じて、森林観光レクリエーションの制度的な変遷の考察を行った研究などが見られる。ただし施策の研究については、我が国の全体像を把握しながら包括的に行われた既存研究が見られなかったため、改めてその展開を整理、考察し直したことは、本論の第2章で述べたとおりである。

さらに、1980年代の後半に入り、多変量解析や地理的解析技法などコンピュータの発達に伴い、森林の持つ観光レクリエーション機能の評価に関する研究が複数行われるようになった。この研究では、京都市の都市近郊林を対象にした25mのメッシュ評価や、岐阜県揖斐川流域をケーススタディエリアとした500mメッシュ評価など、メッシュ解析による地理的評価を中心として多数の研究事例が見られる。しかしながら、第6章で指摘するとおり、これらの研究の多くが現実の森林計画制度など、現実の制度を念頭において行わ

れた研究ではないため、研究間の相互検討や計画論へ向けての現実的な提言などが必ずしも行われていない状況にあると考えられた。またこの研究と関連した動向としては、1990年代から公益的機能としての森林観光レクリエーション機能の経済評価研究が行われている。この研究も、森林観光レクリエーションの貨幣評価手法やトラベルコスト法（旅行費用法）、森林資源勘定、仮想評価法(CVM)など様々な手法が提案されており、現在もその研究が進められており、例えば最近では林野庁計画課(2001)が森林の公益的機能の貨幣評価について行っている。

以上、第3章では研究の動向を総括してきたが、今後の研究の展開を考えるに当たっては、例えば、日本学術会議(2001)が、「地球環境・人間生活に関わる農業および森林の多面的機能の評価についての答申」で示したとおり、農業・森林の生産・管理活動が持つ食料・木材供給等の生産以外の機能、すなわち国土・自然環境の保全ややすらぎ空間の提供といった多面的機能に関して、国内・国際社会が正しい理解をし、社会的認知を得るために、特にその定量的評価を含めた今後の調査研究の展開方向に関して、幅広い見地から総合的に検討することが、今後ますます重要になると考えられるため、より効果的な観光レクリエーションに関わる森林管理の研究を、今後さらに展開していく必要があると考えられた。

第4章では、具体的な調査研究事例として、県内に6箇所ある千葉県民の森を対象に行った管理実態調査、アンケート調査の結果をとりまとめた。

そしてその結果、まず初めに、清和・内浦山・大多喜の3県民の森の比較調査課から、管理している森林の状況が類似していれば、県民の森の面積が広くなるにつれて、ビジター管理に割かれる労力が大きくなり、清和県民の森では大半の労力がビジター管理に割かれる実態が明らかになった。また生物管理に投入される人的労力は、まとめて投入されるという傾向が明らかになった。また、労力が一時に投入されるといっても、特定の期間に集中する傾向があるとは言い切れず、ビジター管理などと比較すると、作業の優先順位が低い傾向が見られた。さらに、各観光レクリエーション施設ごとに行なわれる生物管理の内容を整理した結果、作業内容は観光レクリエーション施設の特徴に依存しない日常的な管理作業が主で、施設を特定して行なわれるものは造園的管理が多かった。以上をもとに検討した結果、現在の管理作業内容には、積極的に森林の利用ポテンシャルを高めるための作業がほとんどないことが分かった。そして、その様な作業を増加させることが、将来の望ましい観光レクリエーション林施業の方向性であると考えられた。ただし、管理作業の内容については、県民の森の運営目的や利用形態の違いで大きく変動することも、館山野鳥の森・船橋県民の森における調査の結果から明らかになった。

そして、県民の森の管理作業のうち、生物管理に着目し、既存の観光レクリエーション林の管理実態に関する情報が考察したところ、①木本管理と草本管理の割合はほぼ同程度行われており、動物に対する管理はほとんど見られなかったこと、②森林管理と造園的管理との割合はほぼ1：2に割合であったこと、③毎年行われるようなルーティーンワークが4分の3を占めること、④管理の目的は、生物の維持保全、景観、ビジター対応がそれぞれ1：1：1の割合であること、⑤作業後の環境変化については、維持作業がほぼ3分の2を占めることなどが明らかになった。

さらに、管理者に対する意識調査を行った結果では、生物管理作業は、①すべての県民の森で現在の優先度の値よりも現在の不足度の値のほうが上回っていたこと、②現在の生物管理作業の優先度の値よりも、将来の生物管理作業の優先度の値のほうが高い、つまり観光レクリエーション林として県民の森の環境を向上させるためには、生物管理作業を現状よりも積極的に推進しなければならないという意識が管理者にあること、③生物管理作業は、ビジター管理作業よりも現在の管理作業の優先度が低く、逆に不足度が軒並み高いという結果になった。以前行った作業日誌を用いた管理作業の定量的な解析結果からも、ビジター管理作業などに押されて生物管理作業の相対的な作業量が減少するという結果がみられたが、今回の結果はその傾向が管理者の意識の面からも裏づけられたこと、④来訪者が多数訪れる施設に対する生物管理作業が優先される傾向があることなどが明らかになった。そして、大面積の県民の森ほど、建物の周辺や広場などの来訪者の目につきやすいところを重点的に整備しようとする意向があり、小面積の県民の森ほど、それ以外の施設も含め、全体的に満遍なく整備しようとする傾向がみられた。

そして、第5章で得られた以上の結果をもとに、流域スケールの森林管理を考えると、面積的な制約条件から、流域スケールでは、より生物管理に手が回らない状況が想定できたため、流域全体の森林について以下に優先順位を持って、整備の方向性をはっきりと示した、向上的な作業を、如何に効果的に行うかということが重要な課題になってくると考えられた。

実際に既存研究に当たってみると、例えば茨城県における県独自の施策「平地林保全対策事業」で平地林の保全を積極的に行っているものの、保全が行える平地林の割合は全平地林の数%にすぎないことを明らかにしたや研究や（柳幸2000）、同じ地域における粗雑組合の活動実態を調査した結果、管理可能な面積は全平地林の1%に満たない割合であるとした研究（穴見・香川2002）など、計画対象森林を満遍なく計画的に観光レクリエーション管理を行うには難しい実態が明らかにされており、また、森林ボランティアが労働力ではないことも過去の研究により明らかにされていた（山本2000）。

最後に、第5章では、現代の森林計画体系の中に、観光レクリエーションのための森林管理をどのように組み込んでいくべきかについて考察を行った。特に、森林管理を行うと有効であると考えられる地域をどのように判定し、その判定された地域の意味的要因やランドスケープ構造について考察した。具体的には、まずはじめに、既存の観光レクリエーションに関わる森林評価手法を概観し、その問題点や展望を整理した。さらに、地域に散在する観光レクリエーション資源や施設の森林管理面から見た場合の重要度や管理が有効な地理的範囲についてアンケート調査を行った。続いて、その結果を受けて、森林管理上留意すべき観光レクリエーション地域の算定手法について、旧笠間営林所管内における予備的検討を行った。そして、その結果をふまえて、茨城県の霞ヶ浦地域森林計画区（都市近郊平地流域）および、八溝多賀森林計画区（中山間流域）の2つの実際の森林計画区に対して手法を適用して考察を行い、両者の比較・考察を行った。

その結果、はじめに、観光レクリエーション資源・施設に対する森林管理上の重要度が、事例的ではあるが定量的に示された。また、中山間地域では、そのウエイトが従来の評価基準よりも高い傾向が指摘できた。また、森林管理上有効な範囲は、資源・施設が点的か

線的・面的かという違いや、眺望的管理があるか否かで異なってくるものの、おおよそ3,000m四方で9割近く、5,000m四方でほぼ全ての範囲がおさまっていることが事例的に明らかにされた。また、眺望管理は、既存文献(篠原1982)からすれば、森林施業による視覚的管理が有効である範囲は2,100~2,800m程度であるとされているため、森林管理にあたっては、各資源・施設を中心におおよそ3,000~5,000m四方を考慮すれば十分であると指摘できる。そのため、例えば5km四方を考慮した地理的な範囲設定で、観光レクリエーション資源や施設の地理的評価を行うと、おおむね順当な解析が行えると判断できた。

さらに、笠間地域を対象に、森林に関わる観光レクリエーション資源及び施設のポテンシャルを算出し、持続可能な森林管理の方向性を検討することができた。そして、茨城県の霞ヶ浦地域森林計画区(都市近郊平地流域)および、八溝多賀森林計画区(中山間流域)の2つの実際の森林計画区に対する適用事例により、本手法の有効性を確認することができた。

(2) 結論

以上の通り、本論文において明らかにしたことを総括した。そして、この地理的評価手法の開発により、これまで森林計画の中で見過ごされがちであったあらゆる種類の観光レクリエーション活動を、流域スケール、あるいは市町村スケールの森林計画の遡上に載せることが可能になり、それに関わる客観的裏づけも一定の水準で確保できたと結論づけられる。

なお、本研究の成果をまとめると、図終-1の様に表すことができる。

終-2 観光レクリエーションのための森林管理をめぐる課題

本研究の課題であった多様な観光レクリエーション活動を森林計画の遡上に載せるための一連の研究については、本論では、以上で一旦区切りをつけることにする。しかしながら、本論の様な手法を開発しただけで、我が国の観光レクリエーションのための森林管理施策や研究が、すべて順調に行われるわけではないことも事実である。

したがって、これから先は、観光レクリエーションのための森林管理をめぐる今後留意すべき課題について言及したい。

(1) 観光レクリエーションのための森林管理を実現させるための森林計画の方向性

2000(平成12)年度末に、林業基本法や森林法の改正作業が行われ、林野行政は大きな変革を遂げようとしている。この流れは、再三述べてきたとおり、1996(平成8)年度に公表された森林資源基本計画から、2000(平成12)年度に公表された林政審議会報告(新たな林政の展開方向)までを通して一貫しており、提示される方針に沿うように、森林計画が今後大きく転換していくことが想定される。

新たな林政あるいは森林計画の展開方向として、ここ数年間で林野庁から公表された答申や計画には様々なことが書かれているが、特に以下に述べる3つの点が、改めての確認の意味も込めて、これからの我が国における森林管理という面から、重要であると指摘したい。

序章	内容: 本研究の意義・必要性を明らかにした 具体的成果: ①これからの森林計画では多様な観光レクリエーション活動を対象にすべきであることを位置づけた ②我が国の観光レクリエーションに関わる近代林野施策通史をまとめる必要性を指摘した ③我が国の観光レクリエーションに関わる戦後の林学分野の研究史をまとめる必要性を指摘した ④我が国の観光レクリエーション活動のトレンドを分析する必要性を指摘した ⑤我が国における観光レクリエーション林における管理作業の実態を明らかにする必要性を指摘した ⑥「観光レクリエーションのために森林管理を行うことが適切な地域を地理的に判定する手法」を開発する必要性を指摘した
第1章	内容: 我が国の観光レクリエーション全体を巡る現況を整理し、森林管理計画における留意点をまとめた 具体的成果: ①我が国では国民の生活の力点が、レジャー・余暇生活へとはっきり移っていることを明らかにした ②レジャー・余暇生活の中でも、野外活動に対する潜在的欲求が高い傾向を明らかにした ③我が国では人生80年時代を想定したレジャー・余暇生活の計画を確立すべきであることを指摘した ④成人層への日常的な余暇空間の提供を念頭において、地域の自然景観や歴史環境などが野外において、一般成人にも分かりやすい仕組みを整えることが重要であることを指摘した
	内容: 我が国の観光レクリエーションの動向を既存林野統計等によりまとめるとともに、トレンド分析を行った 具体的成果: ①我が国の既存林野統計等における観光レクリエーションの内容を、モンテリオールプロセスの基準・指標に合わせて取りまとめ、考察を行った ②レジャー白書を用いて、森林との関わり合いを考慮した我が国の観光レクリエーション活動のトレンド分析を行った
第2章	内容: 我が国の観光レクリエーションに関わる近代林野施策通史をまとめた 具体的成果: ①我が国の土地利用計画制度における森林管理の特徴を明らかにした ②明治期以降の観光レクリエーションに関わる林野施策を、時系列的に8期にとりまとめ、その特徴を明らかにした
第3章	内容: 我が国の観光レクリエーションに関わる戦後の林学分野の研究史をまとめた 具体的成果: ①終戦から20世紀終了までの観光レクリエーションに関わる林野施策の研究史を4時期に分け考察を行った ②戦後の我が国の観光レクリエーション研究には、21種類の大きなテーマが見られたことを明らかにし、その特徴を考察した
第4章	内容: 千葉県民の森を対象に、観光レクリエーション林における管理作業の実態を明らかにした 具体的成果: ①作業員作業日誌を用いて、通年の管理作業の実態を明らかにした結果、管理している森林の状況が類似していれば、県民の森の面積が広がるにつれて、ビジター管理に割かれる労力が大きくなり、生物管理に作業が行き渡らなくなる傾向を明らかにした。 ②AHP法を用いた管理者への意識調査の結果、上記の傾向が管理者の意識面からも裏づけられた
第5章	内容: 「観光レクリエーションのために森林管理を行うことが適切な地域を地理的に判定する手法」を開発した 具体的成果: ①現行の林野施策における観光レクリエーション機能評価手法の特徴と問題点を明らかにした ②地域の観光レクリエーション資源や施設について、森林管理面から見た重要度や、管理が有効な地理的範囲を明らかにした ③3次（1km）メッシュを用いた5×5フィルタリング法を用いた判定法の開発を行った ④新たに開発した判定法の特徴と既存手法と比較した改善点などを考察した

図終-1 本研究における成果のまとめ

a. 公益的機能重視の森林計画への対応

1つ目は、「公益的機能重視の森林計画への変化」という点である。我が国の森林の管理は、1960年代前後に起こった石油革命や産業構造の変化とともに、急激に変化していったことは、多くの森林関係者が指摘しているところである。

燃料として、あるいは有機肥料としての森林の資源的価値は、石油や化成肥料等に置き換わり、経済的な森林利用は急激に衰退してしまった。物質的あるいは産業的な資源利用を基本にしている従来の林政や森林計画では、このような資源利用の急激な構造変化に対応しきれず、結果として森林環境の悪化に繋がったと考えられる。そして、それに合わせるように、観光レクリエーションをはじめとする森林が持つ公益的機能さえも十分に発揮されないようになってしまった。

森林には、二次的自然に依存した豊かな生物相や、余暇的な活用場、あるいは教育的なポテンシャルなど、多彩な公益的機能が潜在的に備わっているが、現在は放置されて林床がササで一面覆われてしまうなど、これらの公益的機能を十分に享受することさえ困難になっている。今後の森林計画では、これらの公益的機能の復活を行うための施策の展開が必須であることは言うまでもない。

b. 地方分権化への流れ

2つ目は、「地方分権化」という点が挙げられる。その中でも特に市町村森林整備計画の果たす役割が、今後重要になると考えられる。本質的なことを考えてみれば自明であるが、人が絶えず森林との関係を持ち続けて管理を行う結果として、我が国の森林は森林として持続的に保たれている。そういう行為が日常的に行われることで、森林は存在し続けられる。森林の保全のためには、森と人間との持続的なインターアクションが不可欠である。

しかしながら、上述の通り、森林に対する伝統的なつながりが希薄になった現在において森林を維持するためには、地域ごとに新しいスタイルで森林との関係を形成することが必要である。この関係の形成は、従来の上意下達的な林業技術体系や、自然科学に基づいた客観的な技術体系を中央政府が検討して地方自治体に指導するという形では生まれ難いと考えられる。むしろ、北海道から九州まで大きく異なる我が国の風土や文化に合わせながら、市町村レベルにおける関わりを核に、新しくローカルな関係の構築を模索することが必要になる。従って市町村森林整備計画の果たす役割は、今後ますます大きくなっていく。

そして、市町村スケールの森林計画を活かすために、地域森林計画や全国森林計画が、どのようなサポートが出来るのかを考えるとなど、計画のボトムアップ的な発想への転換が重要になってこよう。

以上、これからの森林計画は、地域ごとに多彩な森林と人間との関係を明らかにし、その方向性と既存の客観的な技術体系の融合を推進する施策が求められるとともに、計画に盛り込むべきローカリティと全国レベルの客観的な技術の整合性をクロスチェックすることが出来る施策が必要となる。

c. 計画策定への市民参加・合意形成プロセスの重視

3つ目としては、「計画策定への市民参加・合意形成プロセスの重視」という点が挙げられる。

このことは、1992（平成4）年にブラジルで行われた地球サミット以来、国際的な潮流

となっている。例えば、モントリオールプロセスをはじめとする持続可能な森林管理のための基準指標の策定過程やモデルフォレストなどの動きを見れば、地域の森林をどうすべきかという計画を立てる際に、幅広い関係者（ステークホルダー）の参加の下に合意形成を図っていくことが国際的なスタンダードになっていることは間違いない。

我が国でも、1998(平成10)年から、森林計画の策定段階において公告・縦覧制度が取り入れられるなど、この点について前向きに取り組んでいる姿勢が伺える。しかしながら、現状の森林計画に書き込む内容を見ると、ごく普通に生活している市民との接点を持ちうる事項が少ないため、せつかくつくった参加制度に対する一般人の反応はさほど高くない。

例えば、地域の野外教育に森林を活用したいと言うことを住民が発案した場合や、地域の伝統文化を維持するために里山的な環境を保全したいと言うことを計画書に書き込みたい場合、細かく計画事項を検討すれば不可能ではないにしても、現状では一般市民が計画案にコメントを提出できる程度のわかりやすいシステムになっているとは考えられない。従って、地域の森林と人との関係が一般市民からもコメント可能なように、森林計画に書き込む事項を再検討し分かりやすくする必要がある。

更に加えて、現在の森林計画は、森林法における計画対象森林、いわゆる5条森林を対象としている。そして、それ以外の森林や緑地との関係性は、計画書を見ただけでは必ずしも把握し難い。しかし、都市近郊の森林地帯では、5条森林には含まれない屋敷林や社寺林、あるいは公園緑地などと上手に連携をとりながら、トータルとして森林の公益的機能を発揮させることが現実的である。また、森林と農地や集落との繋がりなど、ランドスケープレベルの総合的な土地利用を考慮に入れた上で、改めて森林の果たす役割を明確にしていくことが問われてくると考えられる。この様なことを考えた場合、たとえ森林計画で直接遡上に登らない事項であるにしても、市町村森林整備計画書や地域森林計画書などを閲覧した場合に、一般市民が計画対象外の森林や緑地との関係を把握できるような措置を執る施策が今後必須になると考えられる。

(2) 今後の森林計画への課題

以上、近年の林政の変革を念頭に置いて、森林管理の将来的な方向性について検討を行ってみた。それではその様な方向に森林計画を向かわせるためには、具体的に何が重要になるのかを、以下に4点指摘しておきたい。

a 『資源計画』から『空間計画』へ

1点目は、『資源計画』から『空間計画』への計画パラダイムのシフトが挙げられる。現在の森林計画は、林木の成長を中心とした「資源計画」の色を依然強く残している感が否めない。林木の成長を考慮した計画自体は、資源循環的な林業の推進や、地球温暖化を防止するための炭素吸収源として森林がどの程度役割を果たしているのかを推定するために、非常に重要な内容である。

しかし、現在の様に多彩な公益的機能を対象としながら森林の期待を考慮しなければならない時代においては、現行の森林計画のままでは、よほど森林に関心がある人間の目しかひかないことが容易に想像できる。その最大の理由が、現在の森林計画の中に空間計画

的発想に立った要素が乏しい点が挙げられる。つまり、人々の森林に対する欲求は「この場所の森林をこの様にしたい」という空間計画的な発想に基づいたものが多いのにもかかわらず、現行の森林計画は「これだけの量のもので将来これだけの量に変化する」という資源計画の枠から抜け出していないことにある。

これからは、例えば広域スケールでは、どこにどのような森林があることで公益的機能を効果的に享受できるのかといった森林の配置論をブラッシュアップさせていく必要があり、またサイトスケールでは人間の活動や野生生物の生息などに適した3次元（あるいは時間軸を加えた4次元）空間の森林管理の方針を確立していくことが重要になっていく。

繰り返すと、現在の資源計画的な森林計画に盛り込まれているだけの内容では、都市近郊森林の管理の際に必要な情報を十分に把握できない。そのためには、一般市民が必要と感じ、関心・興味を持つような森林計画事項の導入が必要であり、その際には空間計画的な発想が必須になってくる。

もちろん、資源計画自体も、例えばバイオマス利用などを進めるために必要な事項が何かをスコーピングするなどの、新たな視点が必要である。そして、現在のモニタリングシステムなどを中心とした「資源計画」をブラッシュアップさせた中に、「空間計画」のデータをどうリンクさせていくのかが今後問われてくる。

b 地域の将来像を導ける機能評価の導入

森林空間の将来像を明確にするには、地域が森林にどのような機能を期待しているのかを明らかにした上で、森林がその機能を発揮させるためのポテンシャルをどの程度備えているのか把握することが重要である。

従来、森林の機能評価は、例えば林野庁通達による評価方法（52林計第532号「森林の機能別調査実施要領の制定について」）や都道府県独自の評価方法に基づき行われることが通例である。また、1996（平成8）年の資源基本計画に端に基づき「資源循環」、「森林と人との共生」、「水土保持」の視点から、新たな森林のゾーニングが全国規模で行われる方向にある。

これら従来の機能評価は、木材生産機能や洪水防止機能、水源かん養機能、山地災害防止機能、保健休養機能、生活環境保全機能などの観点から、客観的（科学的）に評価・判定を行い、機能別に高（H）・中（M）・低（L）で表して総合評価を行うという方法が普通であった。

しかしながら、この方法では、「ある地域の森林にはこういう特徴を持っているので、森林の持つどういう機能を強化すれば、より地域のアメニティが高まる」といった提言を必ずしも導くことが困難であると言える。

具体的にいうと、我が国の森林は数千年にわたる長い人間との関わりの歴史の下に構築されたものであり、その結果としての森林は文化的要素の比率が高かったり自然的要素が強かったりという風土的特性を持っている。しかし、その様な地域の特性を丸める形でHMLの3段階に収斂させて評価することで、計画的に管理すべき森林の具体像が捨象されてしまっている。

近年、森林計画へのGISの導入が進められ、デジタルオルソ航空写真などを導入した簡便な解析システムが普及しつつある。これらのシステムが全国的に普及するのはそう遠い

ことではなく、これらのシステムを利用することで森林の機能評価も手軽に行えるようになることが想定される。現状の機能評価は「きれいな評価図を出せる」という程度の役割は果たしても、その地図を見て地域の森林の方向性を誰もが想像できるようにはなっていない。しかし、極近い将来にそれ以上の役割が機能評価に課せられる可能性があると考えられる。地域の意志を反映させるためにGISを使いたいと思わせるようなインセンティブを持つ機能評価手法が今後必要になってくる。

c 必要なデータの取得法の検討

上記の点に関連するが、森林計画策定手法を改善するためには、現行のように、森に向いて樹木や植生を計測するという行為を中心としたデータベースに基づく計画だけでは不十分であると考えられる。我が国に既存の各種空間・資源データベースの活用はもとより、必要があれば新たなデータの取得をタイムリーに開始させられるようなシステムの開発が必要であろう。

どのようなデータが必要で、どの点については既存のデータベースなどが活用可能なかどうか、あるいは現地に赴くモニタリング以外に、新規にどのようなデータを収集する必要があるのかを改めて詳細に整理する必要がある。

このことは、モントリオールプロセスやモデルフォレスト、森林認証などにも関わってくる問題で、森林の持続性を担保するためのデータ取得範囲、取得方法の再検討が近い将来行われる必要がある。

d 森林を管理するための「ネットワーク」、「システム」、「地域目標」の策定

最後に森林管理のための、「ネットワーク」、「システム」、「地域目標」の3点を強調しておきたい。今後都市近郊の森林を、持続的に管理していくためには、「ネットワーク」、「システム」、「地域目標」が不可欠である。

「ネットワーク」とは、森林を管理する人々の繋がりの中で、ある意味インターネットによる人々のつながりに例えられる。ネットワークは、スケールの違いによって様々な場面が想定される。

一番小さなスケールでは、森林を管理したいという個々の一般市民をつなげるための情報ネットワークが必要になる。更には地域の森林ボランティア同士を緩やかにつなげる流域規模のネットワークや、それらを更に全国規模でつなげるネットワークが想定される。また市民団体に限らず、行政や研究者・技術者、林業家などをつないだ総合的なネットワークの構築により、地域の森林が適正に管理されていくことが望ましいと考えられる。

また、次にこのようなネットワークが構築された後には、森林を持続的に維持管理していくためのシステムづくりが重要になってくる。現在、森林管理は、第一次産業を媒介とした人間との繋がりが薄れてしまい、持続可能な利用がなされないまま放置されている場合が少なくない。この様な状況を打破するためには、新たな関係を築き上げ、森林資源を循環させるための「システム」を構築させる必要がある。

更に、このようなシステムをつくりあげた上で、地域の風土に根ざし、かつ地域の誇りやアイデンティティとなるような「地域目標」の設定が重要になってくる。現在の森林計画

では、除間伐や林道の整備目標などは掲げられるものの、地域のアイデンティティがどういふものでそれに沿う森林像がどういふものであるかということにはほとんど言及されてこなかった。

(3) 終わりに

以上、本論をまとめたことで、観光レクリエーションのための森林管理のあり方について、微力ながら一定の知見をまとめることができたと考えている。しかしながら、終-2でまとめたとおり、今後の課題についてもまだまだ多く残されていることが分かる。

今後は、本論でまとめた成果をもとに、さらなる課題解決のための研究を進めていく必要があると考えられた。

謝辞

本学位論文のとりまとめにあたっては、主査である下村彰男博士にはたいへんお世話になりました。また、審査にあたっては、熊谷洋一博士、斎藤馨博士、白石則彦博士、小野良平博士に貴重なアドバイスをいただくことができました。感謝いたします。

また、調査・研究では、森林総合研究所の柳次郎元林業経営部長、香川隆英環境計画研究室長、高山範理研究員、林雅秀研究員、国立環境研究所の渡辺貴史博士、東京農業大学の宮林茂幸博士、関岡東生博士には多大なる協力をいただきました。ありがとうございます。

最後に、私の人生を支えてくれている家族、妻の真樹子、長女の花珠音、次女の綾音には元気づけられました。また、母の恭子には卒業以来長い心配をかけました。執筆の間は必ずしも思い通りにならない事情に左右されて大変でしたが、やはり家族の存在があっこそ、曲がらず、めげずなんとか論文がまとめられたのだと思います。

論文を書き上げれば、ホッとするのかと思っていましたが、実はそうでもありませんでした。研究においても、生き方においても、もっと自分は精進しなければという反省しきりです。日本人の平均的な人生を70万時間とすれば、私はほぼその半分ぐらいの地点にいるのでしょう。

今後とも、曲がったことをせず、多少のことにはめげずに、研究を続けて行きたいと思っています。

引用文献

A

- 阿部正久・石橋整司(1995)森林の総合評価法の開発, 森林計画学会誌25, 33-56
- 鮑戸宏・松田義幸(1989)「ゆとり」時代のライフスタイル, 日本経済新聞社, 東京, 87-92
- 赤尾健一(1992)森林レクリエーション・エリアの経済価値評価法について -旅行費用アプローチを中心に-, 林業経済520, 28-32
- 赤坂信(1996)今世紀初頭のドイツの労働者層の森林レクリエーション, 日本林学会論文集107, 113-114
- 秋田営林局(1966)八幡平地区 国有林野観光資源開発調査書, 秋田営林局, 秋田, 47pp
- 秋田営林局(1967)吾妻地域 国有林野保健休養資源開発調査書, 秋田営林局, 秋田, 24+13pp
- 秋田営林局(1968)鳥海・出羽地域 国有林野観光保健休養資源調査報告書, 秋田営林局, 秋田, 57pp
- 天田泰・宮林茂幸(1998)広域連携による森林レクリエーションに関する一考察, 日本林学会論文集109, 89-90
- 天野正博(1977)メッシュ解析による森林の生活環境機能の評価, 林業試験場研究報告296, 77-100
- 穴見典子・香川隆英(2002)新たな里山資源の活用 -”粗朶”を利用した霞ヶ浦の流域環境保全-, 日本林学会大会学術講演集113, 112
- 青木宏一郎(1984)公園の利用, 地球社, 東京, 212pp
- 青木尊重・井上由扶・関屋雄偉(1968)自然休養林施業の事例的研究(I) 北九州自然休養林の場合, 日本林学会大会講演集79, 66-68
- 青木尊重・井上由扶・関屋雄偉(1969-1)自然休養林施業の事例的研究(II) 金峰山自然休養林の場合, 日本林学会大会講演集80, 95-96
- 青木尊重・井上由扶・関屋雄偉(1969-2)自然休養林施業の事例的研究(III) 菊池水源自然休養林の場合, 日本林学会大会講演集80, 97-98
- 青森営林局(1966)岩木山・大鱈・錠ヶ関・黒石地区 国有林野観光資源開発調査報告書, 青森営林局, 青森, 57pp
- 新本光孝・砂川季昭(1976)西表島における森林の保健休養機能に関する研究(1) -森林レクリエーション利用者のアンケート調査から-, 日本林学会九州支部研究論文集29, 25-26
- 浅野能昭(1983-1)観光開発と環境 -OECD「環境と観光」専門家グループ会合における各国のケーススタディー 「スイスにおけるスキー観光の発展と環境に与えるストレス」の事例研究(訳) -上-, 国立公園401, 26-32
- 浅野能昭(1983-2)観光開発と環境 -OECD「環境と観光」専門家グループ会合における各国のケーススタディー 「スイスにおけるスキー観光の発展と環境に与えるストレス」の事例研究(訳) -下-, 国立公園402, 22-26

B

馬場裕典(1995)国有林野における森林レクリエーションの現状 ー屋久杉ランド利用者の意向ー, 林業経済研究127, 77-82

馬場裕典・吉良今朝芳・枚田邦宏(1996)屋久島における登山者の動向, 鹿児島大学農学部学術報告46, 57-66

馬場裕典(1997)地域住民の森林レクリエーションに対する意識 ー屋久島を事例としてー, 林業経済研究43(2), 51-57

幡建樹・赤尾健一(1993)森林レクエリアの経済価値評価の理論と適用 ー旅行費用法を用いてー, 林業経済研究123, 125-129

Brown, P. J., Driver, B. L. and McConnell, C. (1978) The opportunity spectrum concept and behavioral information in outdoor recreation resource supply inventories: Background and application, General Technical Report, Rocky Mountain Forest and Range Experiment Station, USDA Forest Service RM-55, 73-84

C

千葉県林務課(1986)千葉県における森林レクリエーションの施策 ー豊かな緑とふれあいの場を目指してー, 林野時報33(2), 42-43

千野貞子(1987)少年の日常生活における自然との関わり(II) ー関東地区在住の子供の生活実態を通してー, 日本林学会大会発表論文集98, 67

Clerk, R. N. and Stankey, G. H.(1979) The ROS: A framework for a planning management and research, General Technical Report, Pacific Northwest Forest and Range Experimental Station, USDA Forest service PNW-98, 32pp

D

Department of Conservation Wellington Conservancy(1996) Conservation Management Strategy Volume 1 for Wellington 1996-2005, New Zealand Department of Conservation, Wellington, 231-255

Driver, B. L. and Brown, P. J. (1978) The opportunity spectrum concept and behavioral information in outdoor recreation resource supply inventories: A rationale, General Technical Report, Rocky Mountain Forest and Range Experiment Station, USDA Forest Service RM-55, 24-31

F

Felder, A. J. and Matthews, B. E. (2001) The future of recreational fishing: Examining the intersection of population and participation trends. In TRENDS 2000: Shaping the Future, Contributed Papers of the 5th Outdoor Recreation & Tourism Trends Symposium. Michigan State University, 438pp, Department of Park, Recreation and Tourism at Michigan State University, Michigan, 14-22

福田五月・林進(1989)森林のレクリエーション利用に関する一考察, 日本林学会中部支部大会講演集37, 117-118

古野浩子・薛孝夫・汰木達郎(1993)都市緑地の利用に関する研究(I) -福岡市油山市民の森の利用状況-, 日本林学会九州支部大会研究論文集46, 25-26

古野浩子・薛孝夫・汰木達郎(1993)都市緑地の利用に関する研究(II) -自然観察センターの役割-, 日本林学会九州支部大会研究論文集46, 27-28

古田康夫・小関昇・真路博(1975)大分県「県民の森」について(II) -地帯区分と森林施業-, 日本林学会九州支部研究論文集28, 37-38

古谷勝則・油井正昭・下村彰男・加治隆・親泊素子・田畑貞寿(2003)レジャー・レクリエーションから見た自然環境, レジャー・レクリエーション研究50, 15-40

G

蒲沼満(1992)森林インストラクターの誕生 -市民と森林の橋渡しに期待-, グリーンエージ222, 14-18

業務第二課・国有林野総合利用推進室(1996)「レクリエーションの森」における森林環境整備事業(森林環境整備推進協力金)の実施, 林野時報43(2), 24-27

H

范耀徳・川名明(1982-1)台湾地区の国家公園と森林レクリエーション事業について, 森林レクリエーション研究6, 45-53

范耀徳・川名明(1982-2)中華民国台湾地区の国家公園と森林レクリエーション事業について, 日本林学会大会発表論文集94, 15-16

半田良一編(1990)林政学, 文永堂, 東京, 137-138

原研二(1993)日田地方におけるリゾート開発による地域振興, 林業経済研究123, 135-139

原研二(1994)森林の総合的利用に関する考察(VI) -大分県上津江村を中心に-, 日本林学会論文集105, 81-82

原研二・宮林茂幸(1997)流域林業の新たな展開と森林の総合的利用による地域振興に関する一考察 -群馬県利根川上流流域を事例として-, 林業経済研究43(2), 31-36

林雅秀(2001)森林の多目的利用の現状, (2000年センサスにみる日本林業の構造と森林管理, 204pp, (社)全国農林統計協会連合会, 東京), 179-182

林進・伊藤修宏・玉置雅野・福田五月・大内幸雄(1989-1)森林資源の新しい管理方策に関する研究(II) -「館山・飛越地域」におけるケーススタディー-, 岐阜大学農学部研究報告54, 39-50

林進・伊藤修宏・福田五月(1989-2)育成林業後発地帯における森林のレクリエーション利用を巡る課題, 日本林学会大会発表論文集100, 97-100

林進・大内幸雄・猪股英史・伊藤栄一(1990)レクリエーション・エリア整備のゾーニングについて, 日本林学会中部支部大会講演集38, 33-36

林進・伊藤修宏・玉置雅野(1991)レクリエーションエリアの設計手法 -岐阜県板取村滝波地区でのケース・スタディー-, 日本林学会中部支部大会講演集39, 11-14

林進(1999)Q&A里山林ハンドブック 保全と利用の手引き, 日本林業調査会, 東京, 183pp

枚田邦宏 (1994-1) 都市住民の森林レクリエーション利用とその問題点, 林業経済552, 24-30

枚田邦宏 (1994-2) 森林のレクリエーション利用の実態と評価 - 京都大学芦生演習林を事例にして -, 日本林学会論文集105, 193-194

枚田邦宏・竹内典之(1996)芦生演習林のレクリエーション利用について, 京都大学農学部演習林報告68, 89-99

枚田邦宏 (1997) 屋久島における森林利用(II) 森林レクリエーションの利用の現状, 日本林学会論文集108, 63-66

廣津英昭(1974)風致計画・設計における小施設の役割 -くず入れの設計に関して-, 日本林学会関西支部大会講演集25, 45-48

廣津英昭・井原直幸(1984)自然レクリエーション地域の計画・設計, 広島県農業短期大学報告7, 371-390

廣津英昭(1985-1)森林レクリエーション地の計画・設計に関する研究 (I) もみのき森林公園をケーススタディとして, 広島県農業短期大学報告7, 549-577

廣津英昭(1985-2)森林レクリエーション地域における小施設の役割 くず入れの計画・設計について, 広島県農業短期大学報告7, 579-588

廣津英昭(1985-3)森林レクリエーション地におけるスコーレ的説明法及び説明板の計画・設計的研究, 広島県農業短期大学報告7, 589-602

廣津英昭(1986-1)森林レクリエーション地の修景・設計・計画 (2) 花ヶ迫市民の森をケーススタディとして, 広島県農業短期大学報告8, 63-86

廣津英昭(1986-2)森林レクリエーション地域の偽木の設計, 広島県農業短期大学報告8, 87-100

廣津英昭(1986-3)森林レクリエーション地域の植栽設計, 広島県農業短期大学報告8, 101-114

廣津英昭(1986-4)森林レクリエーション地の計画・設計(1) -計画・設計の原則性について-, 日本林学会関西支部大会講演集, 1-4

廣津英昭(1986-5)森林レクリエーション地の修景・計画・設計(2) -国・件・市レベルのケーススタディについて-, 日本林学会関西支部大会講演集, 5-8

廣津英昭(1987-1)森林レクリエーション地における中型動物(ヤギ)による修景管理 (I), 広島県農業短期大学報告8, 347-370

廣津英昭(1987-2)森林レクリエーション地の修景計画・設計(IV) 安芸地区憩の森(昆虫の森地区)をケーススタディとして, 広島県農業短期大学報告8, 385-395

廣津英昭(1987-3)森林レクリエーション地の「音」環境計画、設計, 広島県農業短期大学報告8, 397-404

廣津英昭(1987-4)風致計画, 設計から見た観光, レクリエーションの動向(I) -1985年の各白書の分析から, 日本林学会大会発表論文集98, 65-66

廣津英昭(1988)森林レクリエーション地域の偽木の設計(II), 広島県農業短期大学報告8, 535-540

檜山生(1914)公園林(Parkwald)とは何ぞ, 大日本山林會報378, 1-6

比屋根哲・大石康彦(1993)森林空間における意識の評価(II) -AHP法による分析の試み-, 日本林学会東北支部会誌45, 69-70
本多静六(1912)社寺風致林論, 大日本山林會報356, 1-20
本多静六(1913)森林公園と琵琶湖風景利用策, 大日本山林會報365, 1-17
堀繁(1991)森林の国土レベルの保健休養効果の貨幣価値評価法, 日本林学会大会発表論文集102, 135-138
堀越昭(1995)世界湖沼会議と市民活動, 第6回世界湖沼会議霞ヶ浦'95論文集vol.3, 1823-1825
星野大介(1995)森林の「遊びの土地」利用論, 日本林学会論文集106, 177-178

I

市原恒一・野田巖(1994)森林レクリエーションのための道路計画, 日本林学会論文集105, 191-192
市原恒一・豊川勝生・山田健(1994)森林公園の来訪者数予測法, 日本林学会誌76(3), 207-217
家原敏郎(1999)日本の新しい森林資源モニタリング調査, 山林1384, 54-61
井川原弘一・香川隆英・田中伸彦・斎藤和彦・阿部由美子(1997)都市近郊林におけるレクリエーション空間としての立木密度に関する研究, 日本林学会論文集107, 189-192
井原直幸・廣津英昭(1984)宮島町における観光レクリエーション計画の展開について, 広島県農業短期大学報告7, 349-369
井原直幸(1995)「つつが交流の森」の整備と利用について, 日本林学会関西支部大会論文集4, 5-8
井原直幸(1996)広島県吉舎町における森林レクリエーション地のイメージ解析, 日本林学会論文集107, 115-117
井原直幸(1997)広島県吉舎町における地域資源利用型森林レクリエーションの展開, 森林応用研究6, 29-32
池ノ上容(1983)自然公園のレクリエーション利用の現状と問題点 -その適正な利用とは-, 国立公園403, 2-6
井本捻(1998)都市の発達段階をもとにした緑地環境区分手法の開発, 森林計画学会誌31, 37-47
乾雅晴・段林弘一・谷口真吾(1989)森林を利用した施設の利用状況, 日本林学会関西支部大会講演集40, 119-122
井鷲裕司・北原英治・加茂皓一(1992)林内透過度と林内煩雑度による都市近郊林の分類・管理指針 -嵐山近郊の森林を事例として-, 日本林学会関西支部大会論文集1, 47-49
石井弘(1983)英国人の野外レクリエーション -特に森林公園の利用について-, 林業技術497, 18-21
伊藤修宏・林進(1989)広域森林レクリエーションの実態と問題点, 日本林学会中部支部大会講演集37, 113-116
伊藤銀月(1910)日本風景新論, 前川文栄閣, 東京, 373pp

伊藤太一(1992) オンネトー野営場における利用とその森林環境への影響モニタリング, 日本林学会大会発表論文集103, 233-234

伊藤太一(1993) アメリカの国有林におけるレクリエーションに対する合意形成, 森林計画学会誌21, 57-68

Ito, T. (1994) An analysis of the forest recreation trend in Japan. In Proceedings IUFRO Intrim Meeting and Excursion in South Korea and China-Taipei. IUFRO Subject Group 6.01,40-47

伊藤太一(1995) カリフォルニア州有林における市民参加 -参加過程としてのレクリエーション調査-, 日本林学会論文集106, 111-114

伊藤太一(2003) 日米比較による森林レクリエーション研究の検証, 日本林学会誌85(1), 33-46

伊藤康行・浅川昭一郎(1991) 都市における緑地の利用行動シミュレーションによる混雑度の解析, 造園雑誌54(5), 329-334

J

持続可能な森林経営における指標の測定法の開発・評価研究チーム(1999) 持続可能な森林経営のための基準と指標-, 森林総合研究所, 茨城, 18pp

K

科学技術庁資源調査会(1966) 自然休養地としての森林の保全開発に関する報告, 科学技術庁資源調査会, 406pp

香川隆英(1989-1) 緑環境と森林レクリエーション的利用に関する最近の動向, 山林1257, 42-47

香川隆英・八巻一成(1989) 都市近郊林におけるレクリエーション利用に関する一考察(1), 日本林学会関東支部大会発表論文集41, 21-22

香川隆英・八巻一成(1990) 都市近郊の自然性の高い森林における保健休養的役割に関する一考察, 造園雑誌53(5), 269-274

香川隆英・八巻一成(1990-1) 森林の保健休養機能に関する一考察(I) -南会津地方におけるAHP法の応用-, 日本林学会大会発表論文集101, 153-156

香川隆英(1991-1) 森林のアメニティに対する森林所有者の意識, 日本林学会大会発表論文集102, 123-126

香川隆英(1991-2) 緑環境と森林のレクリエーション的利用に関する最近の動向, 山林1281, 58-65

香川隆英(1992-1) 緑環境と森林のレクリエーション的利用に関する最近の動向, 山林1293, 58-64

香川隆英・曾根晃一・高野肇・福山研二(1992-2) 都市近郊林のエコロジー・アメニティ機能の総合化に関する研究, 日本林学会大会発表論文集102, 219-221

香川隆英・田中伸彦・宮林茂幸・関岡東生(1993) 森林のレクリエーションと環境林施業に関する研究 -千葉県立県民の森のサイン景観管理-, 日本林学会論文集104, 291-292

香川隆英・田中伸彦・宮林茂幸・関岡東生(1994) 森林のレクリエーションと環境林施業に

- 関する研究(II) ー千葉県立県民の森の景観施業ー, 日本林学会論文集105, 185-186
- 香川隆英(1998)森林レクリエーションの最近の研究動向等について, 山林1367, 69-77
- 香川隆英・曾根晃一・高野肇・福山研二(1992)都市近郊林のエコロジー・アメニティ機能の総合化に関する研究, 日本林学会大会発表論文集103, 219-221
- 香川隆英・田中伸彦(1995)我が国の保安林制度にみる風致施策の展開, ランドスケープ研究58(5), 201-204
- 甲斐重貴(1987)宮崎自然休養林の利用動向と利用者の意識, 日本林学会九州支部研究研究論文集40, 19-20
- 甲斐重貴(1992)自然休養林の利用動向と利用者の意識 ー宮崎自然休養林の事例ー, 日本林学会大会発表論文集103, 187-190
- 上甫木昭春・別所且子・増田昇(2000)兵庫県下のレクリエーション施設における学習型プログラムによる自然教育の現状, ランドスケープ研究63(5), 633-638
- 環境林整備検討委員会(1993)環境林の整備と保全, 151pp, 日本造林協会, 東京, 151pp.
- 環境庁自然保護局計画課(1997)都道府県別メッシュマップー08茨城県ー, (財)自然環境研究センター, 98pp
- 関東中部林業試験研究機関連絡協議会都市近郊林研究会(1991)首都圏における都市近郊林の研究ニーズ調査報告書, 森林総合研究所, 茨城, 80pp.
- 霞ヶ浦流域森林・林業活性化センター(1998)霞ヶ浦流域林業活性化実施計画書, 霞ヶ浦流域森林・林業活性化センター, 2-4
- 片山隆三(1916)林業藝術論を駁す, 大日本山林會報408, 31-36
- 片山隆三(1917)再び林業藝術論を駁す, 大日本山林會報412, 28-32
- 加藤正人(1999)Let's enjoy誰でもできる サンデー森づくり, 森林計画学会出版局, 東京, 82pp
- 加藤誠平(1967)北海道百年野幌森林公園基本計画の研究, 64pp
- 加藤鐵夫(2000)林政の改革について, 林経協月報2001年8月号, 2-18
- 川名明・宗安宏(1977)小金井公園における利用者と林相との関係, 森林レクリエーション研究1, 15-26
- 川名明・逆瀬川和典(1978)平林寺における植生と人との関係, 森林レクリエーション研究2, 43-50
- 川名明・江上憲二(1979)長沼丘陵長沼緑地における人の動態, 森林レクリエーション研究3, 1-30
- 川名明・野口晴彦・小川恵利子(1981)長沼保全緑地の利用状況と周辺住民の意識調査, 森林レクリエーション研究5, 1-32
- 川名明・森永直也・野口晴彦(1984)野川公園における利用者と樹林の関係, 森林レクリエーション研究7, 17-36
- 経済企画庁国民生活局国民生活政策課(1993)平成5年度自由時間充実対策関係予算一覧表, 経済企画庁, 177pp
- 経済企画庁・余暇生活文化関係資料「<資料>余暇・生活行政をめぐる主要な動向」, レジャー・レクリエーション研究, 第9号, 27~39, 1995年
- Kerr, A.(2001)Dogs and demons -The fall of modern Japan, Penguin Books, London,

- 432pp (邦訳:アレックス・カー(2002)犬と鬼, 講談社, 東京, 387pp)
- 木村正信・有永明人(1990)西ドイツにおける自然級用件の公的保障について, 日本林学会大会発表論文集101, 151-152
- 金相潤・永田信(1995)全国の森林インタープリター技能研修の現状と課題, 日本林学会論文集106, 57-62
- 金相潤・永田信(1996)韓国と日本における森林レクリエーションの歴史的展開に関する一考察 -森林レクリエーションの制度的な変遷を中心として-, 林業経済研究129, 57-62
- 金相潤・永田信(1997)韓国と日本における都市型森林レクリエーション利用者の利用特性および意識構造に関する社会経済学的分析 -韓国の北漢山国立公園と日本の明治の森・高尾国定公園を事例として-, 東京大学農学部演習林報告97, 93-127
- 岸根卓郎(1979)森林資源の最適利用計画論とその社会実験 -森林利用の施業区分計画シミュレーション-, 日本林学会大会発表論文集90, 31-32
- 木内秀叙・柳内克行(1991)保健保安林の整備計画手法, 治山研究発表会論文集29, 294-301
- 小島睦雄・藤本拓也(1990)生活環境保全林の現状と管理運営問題 -静岡県生活環境保全林整備事業の場合-, 日本林学会大会発表論文集101, 169-170
- 今野知樹・宮林茂幸(1997)「オートキャンプと森林利用に関する一考察」 -オートキャンプ場開発の実態と問題点-, 日本林学会論文集108, 67-68
- 小島烏水(1905)日本山水論, 隆文館, 東京, 111pp
- 国際林業協力研究会(1996)持続可能な森林経営へ向けて, 日本林業調査会, 東京, 454pp
- 国有林野経営計画研究会編(1994)国有林野経営規定の解説, 日本林業調査会, 409pp
- 木平勇吉(1974-1)山岳地形の鳥瞰図の作成, 日本林学会中部支部大会講演集23, 169-174
- 木平勇吉(1974-2)「場所づけ」を考慮した森林データのファイル -森林区画の数量的表現-, 日本林学会中部支部大会講演集23, 53-56
- 木平勇吉編(2003)森林計画学, 228pp, 朝倉書店, 東京
- 香田徹也(2000)日本近代林政年表, 日本林業調査会, 東京, 2067pp
- 小谷達夫(1982)森林のレクリエーション利用と山村振興, 林業技術472, 7-10
- 小塚力(1998)海岸林のレクリエーション利用 -酒田市「万里の松原」の事例-, 日本林学会論文集108, 91-94
- 小菅久(1989)社法・公益社社有林におけるゴルフ場開発の得失 -群馬県T村の事例-, 日本林学会関東支部大会発表論文集41, 9-12
- 小塚力(1999)森林のレクリエーション利用とその管理の現状, 林業経済研究45(2), 43-48
- 興侶克久(2003)森林の機能的ゾーニングの手法に関する一考察, 林業経済55(10), 2-18
- 熊谷洋一(1979)森林の風致的取り扱い, グリーンエージ1979-5, 37-48
- 熊谷洋一・堀繁(1988)小メッシュによる森林レクリエーション・景観計画のための地形・樹木データの整備, 東京大学農学部演習林報告79, 147-158
- 熊谷洋一(1989)森林の保健休養機能と住民評価に関する研究, 造園雑誌52(5), 175-180
- 熊本県(1995)平成6年度熊本県森林機能調査報告書, 熊本県, 熊本, 119pp
- 熊崎実(1974)森林利用計画に関する研究(第I報) -森林資源利用と環境問題:その経

済的分析一，林業試験場研究報告262，1-40

倉本宣・内城道興(1997)雑木林をつくる 人の手と自然の対話・里山作業入門，百水社，東京，186pp

栗山浩一(1998)CVMによる釧路湿原のレクリエーション価値の評価，林業経済研究44(1)，63-68

黒田迪夫(1975)都市近郊レクリエーション林の研究(IV) その管理体制について，日本林学会九州支部研究論文集28，17-18

L

李基徹(1985)アカマツ平地林のレクリエーション的利用と林床管理に関する一考察，日本林学会大会発表論文集96，67-68

李基徹(1986)公園緑地内の既存アカマツ林のレクリエーション的評価に関する研究，造園雑誌49(5)，197-202

M

前橋営林局(1972)国有林野保健休養資源開発調査報告書 一妙高地区一，前橋営林局，群馬，45pp

前橋営林局(1977)奥鬼怒の森林整備に関する調査報告書，前橋営林局，群馬，91pp

前田豪(1976)メッシュ法とそれを応用した観光レクリエーション計画技法の研究，東京大学学位論文

前野淳一郎(1991)「アメリカ人のアウトドアレクリエーション」概要，月刊観光91/10，42-50

増田晋一・金澤正和・竹内公男(1998)新潟県高柳町における滞在型観光事業の経過と現状，日本林学会論文集109，201-204

松田義幸(1996)スポーツ産業論，大修館書店，東京，10-20

松元明弘・枚田邦宏(1997)森林レクリエーション施設の利用実態と役割 一宮崎県綾町を事例にして一，日本林学会九州支部大会研究論文集50，11-12

松本正彦(1993)森林レクリエーションに対する森林所有者と都市住民の意識 一多良岳周辺森林に関するアンケート調査から一，林業経済539，9-15

松本素道(1921-1)土産品の研究，大日本山林會報458，34-39

松本素道(1921-2)土産品の研究，大日本山林會報459，38-47

宮林茂幸(1975)森林の厚生的機能の評価に関する研究(I) 一その概念と外国の研究例一，日本林学会関東支部大会講演集27，48

宮林茂幸(1978)森林の厚生的機能の評価に関する研究(III) 一森林レクリエーション地区の分布と誘致範囲一，日本林学会大会発表論文集89，47-50

宮林茂幸(1979)森林の厚生的機能の評価に関する研究(IV) 一森林のレクリエーション施設と管理経営についての一考察一，日本林学会大会発表論文集90，15-16

宮林茂幸・塩谷勉(1981)森林の厚生的機能の評価に関する研究(V) 一森林のレクリエーション利用と山村社会について一，日本林学会大会発表論文集91，57-58

- 宮林茂幸(1983)過疎地域における森林のレクリエーション的利用に関する一考察, 日本林学会関東支部大会発表論文集35, 21-22
- 宮林茂幸(1984-1)山村における森林観光レクリエーションに関する一考察, 林業経済研究107, 62-67
- 宮林茂幸(1984-2)森林の厚生の機能の評価に関する研究(VIII) -森林のレクリエーション利用とむらづくり-, 日本林学会大会発表論文集95, 71-72
- 宮林茂幸(1987)低成長下における森林レクリエーション開発の構造変化と山村・林業, 林業経済研究112, 37-48
- 宮林茂幸・鈴木秀彦(1991-1)森林の総合的利用と地域振興(I) -森林レクリエーション開発と地域経済-, 日本林学会大会発表論文集102, 101-102
- 宮林茂幸・鈴木秀彦・今泉俊一(1990)低成長下における山村振興に関する一考察(IV) -森林レクリエーション利用とリゾート開発-, 日本林学会大会発表論文集101, 111-112
- 宮林茂幸・鈴木秀彦(1991-2)森林の総合的利用と地域振興(II) -リゾート開発と地域振興-, 日本林学会大会発表論文集102, 103-104
- 宮林茂幸(1992)森林のレクリエーション利用と森林管理, 山林1299, 2-9
- 宮林茂幸(1993-1)森林レクリエーションとむらおこし・やまづくり, (社)全国林業改良普及協会, 東京, 274pp
- 宮林茂幸(1993-2)森林の総合利用と林業・山村問題, 林業経済541, 8-18
- 宮林茂幸・関岡東生・香川隆英・田中伸彦(1993-3)森林レクリエーション利用と環境林施業に関する研究(III), 日本林学会論文集104, 293-296
- 宮林茂幸・原研二(1994)森林の総合的利用に関する一考察(V), 日本林学会論文集105, 79-80
- 宮林茂幸(1997)リゾート開発後の森林レクリエーションについて, 日本林学会論文集108, 61-62
- 宮林茂幸(1998)森林レクリエーションと交流事業に関する一考察, 日本林学会論文集109, 87-88
- 宮前洋一(1977)第二次林業事業の成果と課題, 日本林学会関西支部大会講演集28, 15-17
- 溝口周道・熊谷洋一(1987)森林立地・林況情報を活用した保健休養機能評価, 造園雑誌50(5), 215-220
- 餅田治之(1992)森林の文化・教育的利用, (1990年世界農林業センサス分析 日本林業の生産構造, 306pp, (財)農林統計協会, 東京), 66-68
- 村瀬房之助(1973)野外レクリエーションを目的とした森林地域の存在形態について, 日本林学会九州支部研究論文集26, 15-16
- 村瀬房之助(1975)都市近郊レクリエーション林の研究(III) その経済的側面について, 日本林学会九州支部研究論文集28, 15-16
- 村瀬房之助(1987)野外レクリエーションの動向と森林景観の保全, 林業経済研究113
- 村瀬房之助(1990-1)国有林におけるレクリエーション事業の展開, 林業経済506, 15-21
- 村瀬房之助(1990-2)保健休養を目的とした森林の整備について -その展開と性格-, 林業経済研究117, 71-74
- 村瀬房之助(1993-1)森林総合利用の性格と展開, 林業経済538, 1-7

- 村瀬房之助(1993-2)森林地域における宗教活動の経済的効果について ー福岡県・篠栗四国八十八カ所巡りー, 日本林学会論文集104, 95-96
- 村瀬房之助(1994)九州におけるリゾートの動向, 林業経済研究126, 52-55
- 村瀬房之助(1996)山村観光に関する研究 ー九州三央地域を対象としてー, 林業経済研究129, 21-26
- 村瀬房之助(1997)山村観光に関する研究 ー大分県、熊本県、宮崎県の動向ー, 林業経済研究43(2), 101-106
- 村島由直・伊藤精悟・木村和弘(1977)観光開発と農林業経営 ー長野県白馬村の事例からー, 信州大学農学部演習林報告14, 1-43
- 森川高行・佐々木邦明・山本尚央(1999)離散連続モデルによる年間観光日数・旅行形態の分析と観光行動の地域差に関する研究, 土木学会論文集618/IV-43, 61-70
- Morisugi, H., Ueda T. and Le, D. H (1995) GEV and nested logit models in the context of classical consumer theory, Journal of Infrastructure Planning and Management, 506/IV26, 129-136

N

- 長池敏弘・青木宏・森田稲子・油井正昭・岡和夫(1985)レクリエーション利用を目的とした高尾山の国有林の整備計画, 森林レクリエーション研究8, 1-49
- 永嶋正信(1985)日光地域の野外レクリエーション利用の変遷に関する研究 (1868年～1931年まで), 造園雑誌48(5), 25-30
- 永嶋正信(1986)政策・社会の動きからみた日光地域の野外Rec.利用の変遷に関する研究 (1931年～1950年まで), 造園雑誌49(5), 25-30
- 永嶋正信(1987)政策・社会の動きからみた日光地域の野外レクリエーション利用の変遷に関する研究, 造園雑誌50(5), 60-65
- 内藤恒方(1978)小岩井農場における森林レクリエーション ー中間報告ー, 森林レクリエーション研究2, 1-10
- 内藤恒方・渋谷芳江(1977)湯ノ丸・高峯自然休養林における森林レクリエーションの利用に関する諸考察, 森林レクリエーション研究1, 27-56
- 内藤恒方・渋谷芳江(1979)国営武蔵丘陵森林公園におけるサイクリング道路の動景観への考察, 森林レクリエーション研究3, 49-86
- 中川重年・しまだしほ・鶴岡政明・長野亮之助(1999)まちの森生活 ソフト林業入門, (社)全国林業改良普及協会, 東京, 94pp
- 中島能道・塩谷勉(1970-1)近郊林地・緑地におけるレクリエーション集団の行動に関する研究(第1報) ー都市住民の森林・緑地に対する誘引性測定の方法ー, 日本林学会九州支部研究論文集24, 18-19
- 中島能道・塩谷勉(1970-2)近郊林地・緑地におけるレクリエーション集団の行動に関する研究(第2報) ー都市住民の森林・緑地に対する誘引性測定の方法ー, 日本林学会九州支部研究論文集24, 19-20
- 中島能道・塩谷勉(1972)南九州の森林・緑地における都市住民のレクリエーション行動に関する研究(II) ー都市住民の行動生態と南九州の森林・緑地に対するイメージー, 日本

林学会大会講演集83, 68-70

中島能道・塩谷勉(1973)南九州の森林・緑地における都市住民のレクリエーション行動に関する研究(III) 一日帰りレクリエーション集団の森林・緑地の利用状況(1)ー, 日本林学会九州支部研究論文集26, 19-20

中島能道・塩谷勉(1975)都市近郊レクリエーション林の研究(I) 都市近郊における日帰りレクリエーション行動の現代的な意識について, 日本林学会九州支部研究論文集28, 11-12

中島能道・塩谷勉・花崎継朗(1975)都市近郊レクリエーション林の研究(II) 宮崎市民の森における日帰りレクリエーション行動の一考察, 日本林学会九州支部研究論文集28, 13-14

中島容子・鮎川広幸・今永正明(1987)鹿児島県県民の森に対する来訪者の意識について, 日本林学会九州支部大会研究論文集39, 21-22

中島容子・今永正明(1987)鹿児島県県民の森に対する来訪者の意識について(II), 日本林学会九州支部大会研究論文集40, 17-18

中村健(1986)アラスカ国有林の森林レクリエーション管理に関する調査研究, 日本林学会中部支部大会講演集34, 175-176

中安正晃・藤塚哲朗・山口修・小林正登・小池達男・若森敦裕(1995)泳げる諏訪湖の再生計画について, 第6回世界湖沼会議霞ヶ浦'95論文集vol.1, 116-119

日本学術会議(2001)地球環境・人間生活に関わる農業および森林の多面的機能の評価について(答申), 日本学術会議, 東京, 87pp

日本興業銀行(1992)国有林野における森林空間利用の現状と今後の課題, IBJ1992年10月号, 20-44

日本林業技術協会(1961)林業百科事典, 丸善, 東京, 1086pp

日本林業技術協会(1971)新版林業百科事典, 丸善, 東京, 1168pp

日本林業技術協会(2001)森林・林業百科事典, 丸善, 東京, 1236pp

日本造園学会(1999)ランドスケープ体系5 ランドスケープエコロジー, 技報堂出版, 東京, 95-150

新島義直・村山醸造(1918)森林美学, 成美堂書店, 東京, 680pp

西田正憲(1999)近代における科学・観光・開発のまなざしと共生の思想, 環境研究114, 5-14

西田正憲・市原信男(1999)世界と日本の持続可能な観光開発の動向, 国立公園577, 2-9

錦見祐次郎・赤尾健一・岩井吉彌(1995)芦生演習林の新しいレクリエーション利用形態についての研究, 京都大学農学部演習林報告67, 79-91

丹羽富士雄・佐藤洋平(1988)緑空間の保健休養機能の測定, 環境情報科学17(4), 31-36

野田巖・柳次郎・丹羽富士男(1986)森林保健休養機能の計量的評価 ー簡略的手法の試みー, 日本林学会関東支部大会発表論文集38, 9-12

野田巖・天野正博・沢田耕作(1990)森林の風致機能の計量的評価(II) ー評価のためのメッシュサイズ、視線入射角に関する考察ー, 日本林学会大会発表論文集101, 157-160

野田巖・内村雅一・沢田耕作(1991)森林の風致機能の計量的評価(III) ー森林植生のウエイトづけに関する考察ー, 日本林学会大会発表論文集102, 229-232

野田真幹(1991)野沢温泉村における民宿経営を中心とした地域活性化の実態, 日本林学会大会発表論文集102, 105-106

野口俊邦(1993)現代林政における森林総合利用の意味, 林業経済539, 1-8

農林水産省統計情報部編(1992)1990年世界農林業センサス, (財)農林統計協会

農林水産省統計情報部編(1997)農林水産統計速報9-73, 農林水産省統計情報部

○

織田悠吾(1973)自然休養林と地元林業労働者の受けとめ方, 日本林学会九州支部研究論文集26, 17-18

小笠原隆三・吉岡水脈(1992)都市近郊林について (I) -箕面国定公園の利用についての意向調査-, 鳥取大学農学部演習林研究報告21, 237-245

大萱直花・石橋整司(1996)森林レクリエーション地における森林景観の役割, 日本林学会関東支部大会発表論文集48, 27-30

大萱直花(1997)森林レクリエーション地域における森林景観の評価指標, 日本林学会論文集108, 107-110

大萱直花・石橋整司(1999)森林計画における景観をもとにした保健休養機能の評価, 日本林学会論文集109, 197-200

大萱直花・石橋整司(1999)都市近郊森林レクリエーション地域における来訪者の意識と行動, 森林環境資源科学37, 35-51

大萱直花・石橋整司(2000)景観認識の分析をもとにした森林の保健休養機能評価法の開発, 森林計画学会誌34(1), 35-50

小川巖(1993)もう一つのリゾート -ソフト面からのアプローチ-, 林業経済532, 26-30

仰木重蔵(1978)観光レクリエーションと森林, 農林出版, 東京, 198-205

大井道夫(1991)野外レクリエーション政策 アメリカとの相違, 国立公園498, 24-25

ORRRC(1962)Outdoor Recreation for America, (邦訳:(財)国立公園協会・日本公園緑地協会(1966)アメリカのレクリエーション, (社)日本観光協会, 140pp)

大石康彦(1991)東北地域における森林の公益的利用・文化教育活動利用, 日本林学会東北支部会誌43, 25-26

大石康彦(1992-1)都市近郊林における保健休養利用の実態 -胡四王山生活環境保全林における事例-, 日本林学会大会発表論文集103, 207-208

大石康彦(1992-2)岩手県における保健休養森林の実態 -一般市民が資料から得る保健休養森林情報-, 日本林学会東北支部会誌44, 23-24

大石康彦・比屋根哲(1993)森林空間における意識の評価(I) -SD法による分析の試み-, 日本林学会東北支部会誌45, 67-68

大石康彦・比屋根哲・田口春孝・村井宏(1994-1)森林環境下における心理構造の解析 -保健休養機能試験林におけるSD法の適用-, 森林計画学会誌23, 33-44

大石康彦・中北理・田口春孝(1994-2)森林の保健休養機能の解明 -WBGTによる温熱環境評価-, 日本林学会東北支部会誌46, 23-26

大石康彦・土屋俊幸・古井戸宏通(1995)森林資源勘定の作成に関する研究(IV) -施設利

- 用型・自然利用型森林レクリエーションサテライト勘定の検討ー, 日本林学会論文集106, 571-573
- 大阪営林局(1933)嵐山風致林施業計画書, 大阪営林局, 大阪, 188pp
- 大阪営林局(1936)東山国有林風致計画, 大阪営林局, 大阪, 130+47+23pp
- 大阪営林局(1965)嵐山国有林地区 観光資源開発調査書, 大阪営林局, 大阪, 219pp
- 大阪営林局(1966)大山国有林地区 観光資源開発調査書, 大阪営林局, 大阪, 166pp
- 岡和夫(1984)森林レクリエーション研究動向調査, 森林レクリエーション研究7, 37-39
- 岡和夫(1985)森林レクリエーション研究動向調査(2), 森林レクリエーション研究8, 51-54
- 大川畑修・澤口勇雄・梅田修史・田中利美(1993)国有林林道の新設にかかる優先順位の判定基準(II)ーレクリエーション利用における林道開設適否の判定ー, 日本林学会関東支部大会発表論文集44, 165-166
- 奥敬一・深町加津枝(1994)生物群集の保全地域におけるレクリエーション利用の可能性ー大阪営林局内の保護林を対象としてー, 日本林学会論文集105, 195-197
- 奥敬一・深町加津枝(2000)林内トレイルにおいて体験された景観系と利用形態の関係に関する研究, ランドスケープ研究63(5)587-592
- 奥村栄朗(1991)森林レクリエーション施設における野生鳥獣とその管理上の対応の実態ー県民の森等に対するアンケート調査からー, 日本林学会関東支部大会発表論文集42, 125-128
- 大永貴規(1986)森林レクリエーション利用の新しい展開に向けて, 森林組合198, 8-12
- 小野雅夫(1950)嵐山國有林の施業に就て, 日本林学会関西支部大会講演集1, 52-54
- 小野良平(1988)飛鳥山にみる名所づくりの思想, 造園雑誌51(5), 13-18
- 小野理(1991)山村のレクリエーション施設に対する来訪者のニーズと施設の運営に関する研究ー滋賀県朽木村をフィールドとしてー, 日本林学会大会発表論文集102, 121-122
- 大田伊久雄(1997)国有林におけるレクリエーション事業の日米比較研究, 京都大学生物資源経済研究3, 29-58
- 太田猛彦・塚本良則・比留間雅紀(1982)山間溪流におけるレクリエーション行動と豪雨時の被災危険度の予測, 森林レクリエーション研究6, 17-36
- 太田猛彦・北村昌美・熊崎実・鈴木和夫・須藤彰司・只木良也・藤森隆郎(1996)森林の百科事典, 丸善, 408-409
- 大谷直史・渡部修(1992)北海道の国立公園における利用者・住民の自然認識(I)ー国立公園の利用形態とその意識ー, 日本林学会北海道支部講演集40, 140-142
- 大浦由美(1992-1)国有林野における森林レクリエーション事業の展開, 林業経済529, 19-32.
- 大浦由美(1992-2)御岳国有林における森林レクリエーション事業の展開, 林業経済研究123, 130-134
- 大浦由美(1998)戦前期における森林のレクリエーション利用と国有林ー明治初期における「官有地公園」と官林との関係を中心にー, 林業経済研究44(1), 39-44
- 小関昇(1975)大分県「県民の森」についてー立地条件と地帯区分ー, 日本林学会九州支部研究論文集28, 35-36

小関昇・真路博(1976)大分県「県民の森」について(III) ー用地買収とその問題点ー,
日本林学会九州支部研究論文集29, 29-30

P

PCAO(1987)American Outdoors, (邦訳:江橋慎四郎監修(1991)アメリカ人のアウトドアレ
クリエーション, (社)日本観光協会, 176pp)

R

ラック計画研究所(1975)観光・レクリエーション計画論, 技報堂, 東京, 209pp

Reed, P. and Merigliano, L. (1990) Managing for compatibility between recreational and
nonrecreational wilderness purposes. In Preparing to manage wilderness in the 21st century.
USDA Forest Service Southeastern Forest Experimental Station, 173pp, USDA Forest Service
General Technical Report SE-66, 95-107

林業試験場(1971)保健保全林 ーその機能・造成・管理ー, 林業試験場研究報告239,
1-139

林野庁(1974)林業構造改善事業の考え方と実際, 全国林業構造改善協議会, 東京, 433pp

林野庁(1977)林野庁通達52計第532号, 森林の機能別調査実施要領の制定について

林野庁(1986)近畿圏における緑地環境の整備保全計画調査報告書

林野庁(1987)森林空間総合利用整備事業の実施について, 林野庁, 東京

林野庁(1989)森林の社会的評価・科学的管理手法に印する調査報告書, 林野庁, 東京,
105-139

林野庁(1991)森林の機能別調査実施要領の制定について(3林野計第294号), 林野庁, 東京

林野庁(1992)平成4年度環境林施業管理技術開発調査報告書, 87pp, 林野庁, 東京

林野庁(1993)平成5年度環境林施業管理技術開発調査報告書, 88pp, 林野庁, 東京

林野庁(1998)平成9年度公益的機能確保のための森林整備手法類型化調査報告書, 林野庁,
東京, 34-38

林野庁(1999)平成10年度公益的機能確保のための森林整備手法類型化調査報告書, 林野庁,
東京

林野庁(2002-1):平成12年度国土総合開発事業調整費 大都市周辺地域における二次的自
然環境等の保全手法検討調査報告書, 林野庁, 177pp

林野庁(2002-2)森林・林業白書 平成13年度 森林と国民との新たな関係の創造に向けて,
300-304, (社)日本林業協会, 東京

林野庁管理課(1981)森林レクリエーションに果たす国有林の役割, 林野時報28(4), 10-14

林野庁計画課(2001)森林の公益的機能評価について, 林野庁計画課, 東京, 62-63

林野庁(2002-3)森林・林業白書 平成13年度 森林と国民との新たな関係の創造に向けて,
35-90, (社)日本林業協会, 東京

林野庁治山課(1989)保健保安林整備の現状と課題, 林野時報36(6), 22-25

林野庁業務第一課(1989)「ふれあいの郷」の実績と今後の進め方, 林野時報36(6), 27-30

林野庁業務第二課(1985)全国国有林レクリエーション利用協会の発足, 林野時報31(11),

36-37

- 林野庁業務第二課(1989)国有林のレクリエーション制度, 林野時報36(6), 30-33
- 林野庁業務第二課国有林野総合利用推進室(1994)国有林の森林空間総合利用, 林野時報41(4), 2-23
- 林野庁計画課(2002)平成14年度版 市町村森林整備計画の手引き, J-FIC, 東京, 17-19
- 林野庁企画課(1989)”森林保健機能増進法案”とは, 林野時報36(6), 34-36
- 林野庁企画課(1997)「森林資源に関する基本計画並びに重要な林産物の需要及び供給に関する長期の見通し」の改訂, 林野時報43(10), 5-19
- 林野庁研究普及課(1989)森林林業を楽しく学ぶ 一体験の森整備事業の概要一, 林野時報36(6), 25-27
- 林野庁森林組合課(1989)林業構造改善事業による森林レクリエーションへの取り組み, 林野時報36(6), 20-22
- 蠟山政道(1953)総合開発とレクリエーション行政 一国立公園法の再検討一, 国立公園40: 国立公園481再掲, 42-45
- 柳幸広登(2000)茨城県の平地林と平地林保全対策, (志賀和人・成田雅美編著, 現代日本の森林管理問題一地域森林管理と自治体・森林組合一, 全国森林組合連合会, 東京, 535pp), 404-427

S

- 齋藤暖男(2001)森林レクリエーションとしてのキノコ採りの変遷 一盛岡市とその周辺地域を事例に一, 東北森林科学会誌6(2), 59-66
- 坂本格(1983)森林レクリエーション・エリアへの訪問行動の特性(1) 一身近なエリアの場合における資源特性および距離の影響一, 日本林学会関西支部大会講演集34, 44-47
- 坂本格(1984)森林レクリエーションエリアへの訪問行動に対する資源特異性と距離の影響, 高知大学農学部演習林報告11, 15-21
- 坂本知己・土屋俊幸・佐野真・中村太士・梶光一・伊藤晶子(1995)ランドスケープ概念による流域計画策定管理に関する一考察, 日本林学会誌77(1), 55-65
- 山岳レクリエーション管理研究会(1998)利用者の多様性に応じた自然公園管理のあり方に関する調査研究報告書(その1), EnVision, 札幌, 109pp
- 山岳レクリエーション管理研究会(2002)利用者の多様性に応じた自然公園管理のあり方に関する調査研究報告書(その2), (有)自然環境コンサルタント, 札幌, 80pp
- 札幌営林局(1965)支笏湖・定山溪地区 観光資源開発調査報告書, 札幌営林局, 北海道, 62pp
- 佐々木博(1987)日本の森林レクリエーション地域, 筑波大学人文地理学研究XI, 67-81
- 佐々木博(1998)イメージが創った観光地清里高原, 筑波大学人文地理学研究XXII, 27-57
- 佐藤孝弘・柳井清治(1999-1)森林レクリエーションとしての溪流釣りの実態把握 一当別町一番川流域でのアンケート調査から一, 北方林業51(12), 277-281
- 佐藤孝弘・山口陽子(1999-2)森林公園利用者と森林散策について 一利用者意識と施設配置から考える一, 日本林学会北海道支部論文集47, 148-150

- Scott, D. (2001) Exploring the diversity among wildlife watchers and birdwatchers. In TRENDS 2000: Shaping the Future, Contributed Papers of the 5th Outdoor Recreation & Tourism Trends Symposium. Michigan State University, 438pp, Department of Park, Recreation and Tourism at Michigan State University, Michigan, 30-39
- 薛孝夫(1982)自然保全を前提とした森林レクリエーション的活用に関する研究 ―緑地環境を基盤とした計画設計論―, 九州大学農学部演習林報告52, 1-106
- Shibasaki, S. and Nagata, S. (1999) Estimation of the number of tourists to Yakushima Island, Journal of Forest Economics 45(3), 33-38)
- 志賀重昂(1894)日本風景論 (志賀重昂著 近藤信行校訂(1995)日本風景論, 岩波書店, 東京, 395pp)
- 重松敏則・高橋理喜男(1982)レクリエーション林の林床管理に関する研究 ―アカマツ林における下刈りが現存量に及ぼす効果―, 造園雑誌45(3), 157-167
- 重松敏則(1982)レクリエーション林における下刈り・光・踏圧の諸条件が林床植物に及ぼす効果, 造園雑誌46(5), 194-199
- 重松敏則・高橋理喜男・鈴木尚(1985)二次林林床における光条件の改良が林床植物に及ぼす効果, 造園雑誌48(5), 151-156
- 重松敏則(1988-1)レクリエーションを目的とする里山の生態的管理手法と教育・市民参加による管理システムの展望, 森林文化研究9(1), 75-91
- 重松敏則(1988-2)レクリエーションを目的とした二次林の改良とその林床管理に関する生態学的研究, 大阪府立大学紀要, 151-211
- 島田正文・丸田頼一(1988)市街地近郊の二次林を主体とした公園緑地における昆虫類の生息に関する研究, 造園雑誌51(4), 219-227
- 嶋崎譲(2000)林政総研レポート 林政政策の方向―林業基本法の改定と森林法制の転換に向けて―, (財)林政総合調査研究所, 145pp
- 下平敦(1989)森林の保健機能の増進に関する特別措置法案について, 治山34(3), 10-13
- 下村彰男(1988)観光資源とその楽しみ方の変遷, 観光268
- 下村彰男(1989)近世・明治期における温泉地の空間構造に関する一考察, 造園雑誌52(5), 223-228
- 下村彰男(1993)わが国における温泉地の空間構成に関する研究(I) ―近世後期から明治期にかけての温泉地の空間構成―, 東京大学農学部演習林報告90, 23-95
- 下村彰男(1996)最近の保健休養・レクリエーションの動向と課題, 山林1348, 64-70
- 下村彰男(1999)地域森林景観試論, 森林科学27, 20-25
- 篠原修(1982)新体系土木工学59土木景観計画, 技報堂出版, 東京, 91
- 篠原修(1986)道路景観2 概論(その2)景観設計の定石, 交通工学121(5), 31-37
- 森林・林業・木材辞典編集委員会(1993)森林・林業・木材辞典, 日本林業調査会, 327
- 森林・林業・木材産業基本政策検討会(1999): 森林・林業・木材産業基本政策検討報告 ―森林・林業・木材産業に関する基本的課題―, 林野庁, 東京, 25pp
- 森林総合研究所(1997)森林総合研究所研究会報告No. 14 「持続可能な森林経営のための基準・指標」の現状と問題点, 森林総合研究所, 茨城, 88pp
- 森林総合研究所「持続可能な森林経営」委員会(1997)「持続可能な森林経営のための基

- 準・指標」の現状と問題点，森林総合研究所，茨城，70-78
- 塩田敏志(1975)森林レクリエーション地の計画方法論に関する研究，東京大学学位論文
- 塩田敏志(1983)森林地域のレクリエーション・サイト ―その現状と将来展望―，林業技術497，7-9
- 塩田敏志(1988)リゾート開発と自然保護，国立公園469，8-11
- 塩谷勉・宮林茂幸(1977)森林の厚生の機能の評価に関する研究(2) ―戸隠自然休養地区の調査から―，日本林学会関東支部大会講演集29，33-34
- (社)日本観光協会(1975)：都民の憩いの広場基本構想計画策定調査報告書 ―奥多摩・高尾地域計画編―，(社)日本観光協会，東京，49pp
- (社)日本観光協会編(1994)全国観光情報ファイル，(社)日本観光協会，東京
- (社)日本観光協会(1999)：全国観光情報データベースCD-ROM版，(社)日本観光協会，東京
- (社)日本林業技術協会(1971)新版林業百科事典，丸善，東京，1100
- (社)日本林業技術協会(1992)林業ノート，(社)日本林業技術協会，東京，15-17
- (社)全国林業改良普及協会(1998)市町村森林整備計画ガイド，(社)全国林業改良普及協会，東京，32pp
- 庄子康・栗山浩一(1999)野外レクリエーションによる過剰利用に対する規制について，林業経済研究45(1)，51-56
- 新造園家集団(1966)伊豆半島観光資源開発試論 ■須崎ほか5地区の観光開発の方向■，静岡県，静岡，63pp
- 新造園家集団(1966)自然景観の解析 '66 DEC ■阿蘇観光開発への適用■，静岡県，静岡，72pp
- 十代田朗・野崎哲矢(2000)観光地としての立山黒部アルペンルートの形成過程と富山県側での論議，ランドスケープ研究63(5)，743-748)
- 総理府(2000)平成12年版観光白書，大蔵省印刷局，東京，28
- 総理府内閣総理大臣官房広報室(1996)森林・林業に関する世論調査，総理府内閣総理大臣官房広報室，東京
- Stankey, G. H. and Brown P. J(1981)明日の森林におけるレクリエーションの計画と管理のための一技術，国際林業研究機関連合(IUFRO)世界大会論文集17，741-747
- 菅原聰・太田和則(1989)企画された森林散策の効果，日本林学会中部支部大会講演集37，111-112
- 菅原聰・谷貝東彦(1994)カナダにおける野外レクリエーション，日本林学会中部支部大会講演集42，35-36
- 杉浦孝蔵・諸富一文(1989-1)都市および地域住民の民俗資料館「三州足助屋敷」の活用状況と評価，日本林学会大会発表論文集100，101-104)
- 杉浦孝蔵・宮崎洋一(1989-1)山村における大規模保養基地が山村振興に及ぼす影響 ―新潟県グリーンピア津南の事例―，日本林学会大会発表論文集100，105-108
- 鈴木秀彦・宮林茂幸・今泉俊一(1990)低成長下における山村振興に関する一考察(V) ―群馬県月夜野町のリゾート開発と地域振興―，日本林学会大会発表論文集101，113-114
- 鈴木秀彦(1992-1)リゾート開発と地域問題(1) ―群馬県月夜野町を中心として―，林

業経済524, 27-32

鈴木秀彦(1992-2)リゾート開発と地域問題(2), 林業経済526, 29-32

鈴木秀典・市原恒一・野田巖(1998)レクリエーション用森林道路の計画, 森林利用学会誌13(3), 151-160

鈴木尚夫(1979)森林計画制度と林業の組織化, 森林組合107, 13-23

鈴木美知子・川村誠(1994)自然公園におけるレクリエーション行動の研究 -大山国立公園の登山行動-, 鳥取大学農学部演習林報告22, 83-114

鈴木忠義(1983)新しい社会と森林レクリエーション, 林業技術497, 2-5

T

田端英雄編(1997)里山の自然, 保育社, 大阪, 101-132

高木勝久・青木尊重(1969)自然休養林に関する基礎的研究(I) -菊池水源自然休養林のアンケート調査について-, 日本林学会九州支部研究論文集23, 11-12

高木勝久・青木尊重(1970)自然休養林に関する基礎的研究(II) 到達性についての一考察, 日本林学会大会講演集81, 53-55

高木勝久・青木尊重(1971-1)自然休養林に関する基礎的研究(III) -予備的考察とその方法について-, 日本林学会大会講演集82, 41-42

高木勝久(1971-2)自然休養林に関する基礎的研究(IV) -摘出された要因群の内容について-, 日本林学会九州支部研究論文集25, 30-31

高木勝久・青木尊重(1972-1)自然休養林に関する基礎的研究(V) -福岡市近郊における森林レクリエーション利用者の性格について-, 日本林学会大会講演集83, 70-72

高木勝久・青木尊重(1972-2)福岡都市圏における森林レクリエーション行動の要因分析, 九州大学農学部学芸雑誌26(1-4), 569-575

高木勝久・青木尊重(1973)自然休養林に関する基礎的研究(VI) -森林recreation地の吸引構造について-, 日本林学会大会講演集84, 51-53

高木勝久・青木尊重(1974)自然休養林に関する基礎的研究(VII) -吸引距離の分布現象について-, 日本林学会九州支部研究論文集27, 7-8

高木勝久・青木尊重(1975)自然休養林に関する基礎的研究(VIII) -都市環境とレクリエーション行動発生の関係について-, 日本林学会九州支部研究論文集28, 33-34

高木勝久(1983)レクリエーション・サイトとしてのわが国の森林の特性, 林業技術497, 10-13

高橋理喜男(1979)緑とレクリエーション -野山のあり方をめぐって-, 山林1140, 19-24

高橋達(1953)スキー試作について, 日本林学会東北支部開始3(1~3), 118-122

高梨武彦(1987)快適な遊歩道の設計指針案, 林業技術539, 42-44

高野憲一(1990)森林の土地利用に関する制度の運用の見直しについて, 治山35(6)15-22

高柳敦・川村誠・長山宗美(1992)環境林施業の展開と里山保全行政(I) -環境林整備事業」の事例分析から-, 日本林学会大会発表論文集103, 225-226

- 武田宏(1999)観光地化しているブナ二次林(美人林)の維持管理について,新潟県森林研究所研究報告41, 23-26
- 武田泉(1993)リゾート開発の展開と地域の対応 -トマム開発を事例として-, 林業経済532, 21-26
- 田村剛(1916)林業藝術論, 大日本山林會報402, 6-11
- 田村剛(1917-1)片山隆三氏に答へて, 大日本山林會報410, 21-24
- 田村剛(1917-2)造園の起源と藝術としての造園, 大日本山林會報413, 15-23
- 田村剛(1917-3)風景美と造園美と人工林の美, 大日本山林會報419, 4-12
- 田村剛(1918)府縣立公園と郷土風景の保存, 大日本山林會報429, 16-21
- 田村剛(1919-1)森林公園, 大日本山林會報440, 1-5
- 田村剛(1919-2)森林公園(承前), 大日本山林會報441, 1-3
- 田村剛(1920)公園設計に関する豫備調査に就て, 大日本山林會報457, 1-5
- 田村剛(1929)森林風景計画, 成美堂, 東京, 230pp
- 田中伸彦(1991)次元的景観概念を導入した森林の取扱いに関する一考察, 造園雑誌54(5), 179-184
- 田中伸彦・香川隆英・宮林茂幸・関岡東生(1993)森林のレクリエーションと環境林整備に関する研究 -千葉県立県民の森における森林レクリエーションと森林空間整備-, 日本林学会大会発表論文集104, 285-290
- 田中伸彦・香川隆英・宮林茂幸・関岡東生(1994-1)館山野鳥の森における森林レクリエーションのための空間整備, 日本林学会関東支部大会発表論文集45, 143-146
- 田中伸彦・香川隆英・宮林茂幸・関岡東生(1994-2)船橋県民の森における森林レクリエーションのため空間整備, 日本林学会論文集105, 187-190
- 田中伸彦・安原加津枝・奥敬一・香川隆英(1994-3)森林風景写真の水平方向への構図の移動に伴う被験者の認識と評価の変化に関する一考察, 造園雑誌57(5), 301-306
- 田中伸彦・香川隆英・宮林茂幸・関岡東生(1995-1)東庄県民の森における森林レクリエーションのための空間整備及び管理者の意識, 日本林学会関東支部大会発表論文集46, 7-10
- 田中伸彦・香川隆英・柳次郎(1995-2)レクリエーション林における生物管理作業に関する考察-千葉県立県民の森における調査事例-, 日本林学会論文集106, 561-562
- 田中伸彦・香川隆英・宮林茂幸・関岡東生(1995-3)レクリエーション林における生物管理作業に対する管理者の意識(I) -清和・内浦山・大多喜県民の森における調査事例-, 日本林学会論文集106, 563-568
- 田中伸彦・香川隆英・宮林茂幸・関岡東生(1995-3)レクリエーション林における生物管理作業に対する管理者の意識(II) -館山野鳥の森・船橋県民の森における調査事例-, 日本林学会関東支部大会発表論文集47, 1-4
- 田中伸彦(1996)アウトドアライフ充実のための行政施策 -林野庁の施策を中心に-, レジャー・レクリエーション研究33, 38-44
- 田中伸彦(1997-1)基準6:社会的要望を満たす長期的・多面的な社会・経済便益の維持及び増進 -レクリエーション及び観光-, (森林総合研究所研究会報告No.14「持続可能な森林経営のための基準・指標」の現状と問題点, 森林総合研究所, 茨城, 88pp),

70-78

田中伸彦・坂口精吾(1997-2)霞ヶ浦流域における森林の歴史的変遷に関わる研究, 森林計画学会誌28, 15-22

TANAKA N. and FUKAMACHI K. (1997-3)People's Perceptions and Methods to Evaluate a 360° Panoramic Coppice Forest Scene, Journal of Forest Planning 3, 73-81

田中伸彦(1998-1)都市近郊地域における流域レベルの森林保全制度の検討, 森林計画学会誌30, 1-14

田中伸彦(1998-2)森林レクリエーション, (林野庁(1998)林業技術ハンドブック, (社全国林業改良普及協会, 東京, 1969pp) 248-262

田中伸彦(1999)森林観光レクリエーションに関わる資源・施設の地域ポテンシャル算出に関する考察 - 笠間地域を対象としたケーススタディー, レジャー・レクリエーション研究41, 102-105

田中伸彦(2000-1)流域レベルの森林観光・レクリエーションポテンシャルの算定, ランドスケープ研究63(5), 607-612

田中伸彦(2000-2)晴れと曇りで森林景観に対する好ましさがどれだけ変化するのか, 日本林学会関東支部大会発表論文集51, 27-30

TANAKA N. nad OKU H.(2000-3)Analases of People's Perception and Evaluation of Changing Deciduous Forest Scenes, IFLA Eastern Regional Conference '00 Proceedings Book, 117-123

TANAKA N. (2001) Estimation of Recreation / Tourism Potential Taking Forest Management into Consideration, TRENDS 2000: Shaping the Future - Contributed Papers for the 5th Outdoor Recreation & Tourism Trends Symposium 5 ,288-294

TANAKA, N. and WATANABE T. (2001) Forest Management around Lake Kasumigaura that Harmonizes Human Activities with Forests, 9th International Conference on the Conservation and Management of Lakes -Conference Proceedings, Session 2, 73-76

田中伸彦・渡辺貴史(2001)中山間市町村における観光レクリエーション資源・施設のための森林整備の方向性 - 八溝多賀森林計画区内の森林管理者に対するアンケート調査 -, 日本観光研究学会論文集16, 193-196

田中伸彦・渡辺貴史(2002-1)中山間流域における森林管理上重要な観光レクリエーション地域の構造, ランドスケープ研究65(5), 615-620

田中伸彦・渡辺貴史(2002-2)平地流域で観光レクリエーションの観点から森林管理が重要な場所の地形構造および土地利用構造, 日本林学会誌84(4), 280-283

田中伸彦(2003-1)森林管理上留意すべきレクリエーション活動の総括的トレンド分析, 日本林学会誌85(1), 47-54

田中伸彦・八巻一成(2003-2)特集「森林レクリエーション研究の展開」にあたって, 日本林学会誌85(1), 31-32

田中伸彦(2003-3)ソフト機能を活かすための森林管理へ向けて, 林業技術731, 24-29

田中俊之(1996-2)高齢者と障害者に配慮した森林レクリエーション - 施設面の充実を中心として -, 林業技術649, 15-17.

谷口生(1917)林業藝術論を讀みて, 大日本山林會報412, 25-27,

Thapa, B. (2001) Trends and Issues in select winter recreation activities: Alpine skiing and

- snowboarding. In TRENDS 2000: Shaping the Future, Contributed Papers of the 5th Outdoor Recreation & Tourism Trends Symposium. Michigan State University, 438pp, Department of Park, Recreation and Tourism at Michigan State University, Michigan, 40-47
- 谷中英記(1990)都市近郊林の計画における基本的課題, 造園雑誌53(5), 263-268
- 谷中英記(1992)園路密度より見た都市近郊レクリエーション林のタイプ, 造園雑誌55(5), 211-216
- 谷中英記(1993)都市近郊レクリエーション林の規模と適正収容力について, 造園雑誌56(5), 193-198
- 富沢亜希子・井上公基・石垣逸朗(1995)都市近郊における利用目的別利用者意識に関する研究 -高尾山と丹沢の比較-, 日本林学会関東支部大会発表論文集47, 117-118
- 利根薫(1986)ゲーム感覚意志決走法 -AHP入門-, 日科技連出版社, 東京, 218pp
- 東京営林局(1971)奥久慈・筑波地区 国有林野観光保健休養資源開発調査報告書, 東京営林局, 東京, 45pp
- 土屋禎治(1993-2)国有林経営における森林の保健的利用 -その位置付けの史的考察-, 日本林学会北海道支部講演集41, 38-40
- 土屋俊幸(1981)交通資本による観光開発の展開過程<昭和戦前期> -富士急行を事例として-, 林業経済研究100, 30-34
- 土屋俊幸(1982-1)町有林経営における林業と観光の結合, 林業技術479, 27-30
- 土屋俊幸(1982-2)交通資本による観光開発の展開課程 -戦後期-, 林業経済35(9), 11-21
- 土屋俊幸(1985)第一次大戦以降における観光資本の別荘地開発 -箱根土地株式会社の経営展開を中心として-, 林業経済444, 1-16
- 土屋俊幸(1987)スキー場開発の進展と地域の対応 -「リゾート開発ブーム」下の動向-, 林業経済研究112, 25-36
- 土屋俊幸(1990-1)スキー場開発と環境アセスメント -アメリカ合衆国国有林の事例-, 北方林業42(12), 337-341
- 土屋俊幸(1990-2)リゾート論の展開と林業経済研究, 林業経済500, 23-32
- 土屋俊幸(1993-1)「リゾート開発」ブームの実態と問題点, 林業経済532, 14-21
- 土屋俊幸(1994-1)野外レクリエーション, (森林サイエンス研究会(1994)森林サイエンスの現状と今後の展望, (社)全国林業改良普及協会, 東京, ?pp), 104~105
- 土屋俊幸(1994-2)日本人は本当に森林が好きなのだろうか? -野外レクリエーションからのアプローチ-, 北方林業46(3), 65-67
- 土屋俊幸(1995)書評「森林レクリエーションとむらおこし・やまづくり」, 林業経済559, 27-29
- 土屋俊幸(1999)森林レクリエーション研究(船越昭治編著(1999)・林業・山村問題研究入門, 地球社, 東京, 343pp) 215-222
- 土屋俊幸(2002)森林資源の多面的利用の現状, (餅田治之編(2002)日本林業の構造的変化と再編過程 -2000年林業センサス分析, (財)農林統計協会, 東京, 237pp) 56-81
- 塚本良則・野口晴彦・西脇弘(1978)山間溪流におけるレクリエーションの実態調査 -夏の秋川渓谷における調査例-, 森林レクリエーション研究2, 11-33

露木聡(1998)都市の発達段階をもとにした緑地環境区分手法の開発, 森林計画学会誌31, 37-47

U

上原巖(1998)ドイツバート・ウェーリスホーヘン市における森林レクリエーション, 日本林学会論文集109, 223-226

Uehara, I., Sasaki, Y. and Yamada, C.(1999)Effects of forest recreations in the treatment of mental disabilities, 中部森林研究 47, 167-170

上原敬二(1917)林業非藝術論, 大日本山林會報411, 15-20

上原敬二(1918)神社境内林論, 大日本山林會報424, 16-28

USDA Forest Service (1980-1) Proceedings 1980 national outdoor recreation trends symposium Volume I, USDA Forest Service General Technical Report NE-57, 223pp

USDA Forest Service (1980-2) Proceedings 1980 national outdoor recreation trends symposium Volume II, USDA Forest Service General Technical Report NE-57, 249pp

W

早稲田収・山本久仁雄(1971)風致林の施業に関する研究I - 耳成山における昭和13~16年施業地の現況調査 -, 日本林学会関西支部大会講演集22, 38-40

渡辺修・大谷直史(1992)現代日本人の自然認識(I) - 国立公園利用者の自然利用形態と意識 -, 日本林学会大会発表論文集103, 191-192

ウエストン, W.(1896)Mountneering and explorarion in the Japanese Alps, (邦訳:岡村精一(1995)日本アルプス 登山と探検, 平凡社, 東京, 381pp)

Y

養父志乃夫・重松敏則(1985)野生草花の導入による林床景観の形成手法 - キキョウの生育と光条件および刈り取り時期との関係 -, 造園雑誌48(3), 176-181

八木俊彦(1992-1)森林のゴルフ場開発に関わる環境保全と林地開発許可制度, 鳥取大学農学部演習林研究報告21, 125-137

八木俊彦(1992-2)森林のゴルフ場開発の基本問題, 林業経済524, 21-26

山岸清隆(1979)石川県津幡町 シイタケを観光資源に, 現代林業156, 54-59

山口和男(1993)米国に於ける森林レクリエーションの現況と問題点, 国立公園518, 14-18

山口和男(1994-1)米国の国有林におけるレクリエーションの現況, 山林1320, 35-41

山口和男(1994-2)レクリエーションの場におけるキャリング・キャパシティと利用規制の概念, 山林1322, 54-58

山口和男(1999)利用者の多様性に応じた自然公園での土地区分の概念 - 米国のROS (Recreation Opportunity Spectrum)の概念について, 北方林業51(2), 17-44

八巻一成・香川隆英(1989)都市近郊林におけるレクリエーション利用に関する一考察(2) - ポテンシャル概念にもとづく千葉県民の森の特性 -, 日本林学会関東支部大会発表論文集41, 23-24

- 八巻一成(1991)北海道における森林公園の分布と施設整備の現状－林業関係補助事業による森林公園を対象にして－, 北方林業43(7), 69-172
- 八巻一成・土屋俊幸(1992-1)地方小都市周辺におけるレクリエーション林の特徴, 日本林学会大会発表論文集103, 223-224
- 八巻一成・土屋俊幸(1992-2)森林公園の利用形態と評価に関する考察, 日本林学会北海道支部講演集40, 146-148
- 八巻一成(1993-1)「森林の総合利用」施策の現状－北海道の場合－, 林業経済540, 1-6
- 八巻一成・土屋俊幸(1993-2)森林公園における利用者数変動に関する考察－自動計測装置(ゲートカウンター)の適用－, 日本林学会論文集104, 309-312
- 八巻一成・土屋俊幸(1993-2)森林レクリエーション行動分析についての一考察－時間地理学概念の適用－, 日本林学会北海道支部講演集41, 44-46
- 八巻一成(1994)野幌国有林におけるレクリエーション施設整備に関わった主体の影響－マスタープランと実際の整備過程の比較を通して－, 日本林学会論文集105, 199-204
- 八巻一成(1995)野幌森林公園における歩道整備の現状, 日本林学会北海道支部論文集43, 125-126
- 八巻一成(1996)森林レクリエーション計画のためのアクセス難易度計測手法, 日本林学会論文集107, 123-126
- 八巻一成(1997)支笏洞爺国立公園におけるレクリエーションアクセスの特徴, ランドスケープ研究60(5), 593-596
- 八巻一成・広田純一・土屋俊幸・山口和男・小野理(1998)レクリエーション空間の多様性に着目した計画手法の試み, 日本林学会論文集109, 209-210
- 八巻一成(1999)森林レクリエーション計画制度および利用体験にもとづく管理計画手法に関する研究, 北海道大学農学部学位論文, 169pp
- 八巻一成(2000-1)アメリカ合衆国連邦所有地における土地管理とレクリエーション計画, 林業経済研究46(1), 75-80
- 八巻一成・広田純一・小野理・土屋俊幸・山口和男(2000-2)利用者の多様性を考慮した森林レクリエーション計画－ROS (Recreation Opportunity Spectrum)の概念の定義－, 日本林学会誌82, 219-226
- 山本久仁雄(1974)風致林の施業に関する研究II－大和三山における昭和13～16年施業地の現況調査－, 日本林学会関西支部大会講演集25, 49-52
- 山本信次(2000)森林ボランティアの現状と可能性－市民セクター形成を中心に－, 林業経済研究46(2), 25-30
- 山本由加・林進・伊藤栄一(1997)林内環境における緑地訪問者の意識構造, 中部森林研究45, 39-41
- 山根正伸(1989)身近な森林の保健休養機能の指標化の試み, 日本林学会大会発表論文集100, 25-26
- 山根正伸(1991)都市近郊における身近な森林の利用と保全(III)－森林公園における樹林管理への住民参加手法の検討－, 日本林学会大会発表論文集102, 211-214
- 山根正伸(1992)都市近郊における身近な森林の利用と保全(V)－身近な森林の保全に関する住民意識の検討－, 日本林学会大会発表論文集103, 205-206

- 山瀬敬太郎・田中義則・乾雅晴(1993)快適な森林空間の創造に関する研究(III) ー林相整備の前後での利用度と満足度の変化ー, 日本林学回関西支部大会論文集2, 9-12
- 山瀬敬太郎(1995)快適な森林空間の創造に関する研究(VI) ー森林整備に対する利用者の意識と評価ー, 日本林学回関西支部大会論文集4, 9-12
- 山科健二(1971)森林風致施業に関する研究(II) 樹葉の色彩の季節的变化, 日本林学会関西支部大会講演集22, 1-2
- 山下隆之祐(1986)森林レクリエーションと森林組合, 森林組合198, 5-8
- 山下友一(1981)保健保安林の整備, 林野時報28(4), 7-10
- 山浦常吉(1980)風致林を保護すへし, 大日本山林會報告100, 16-17
- 八溝多賀流域林業活性化センター(1993)八溝多賀流域林業活性化基本方針書, 八溝多賀流域林業活性化センター, 茨城, 58pp
- 山崎敬嗣(1991)リゾート開発の展開と森林管理問題 ー新潟県湯沢町を事例としてー, 日本林学会大会発表論文集102, 115-117
- 柳次郎(1969)山村観光の実体とその傾向, 日本林学会関東支部大会講演要旨集21, 67
- 柳次郎(1972)山村観光と観光評価, (社)日本林業技術協会, 東京, 56pp
- 柳次郎(1976)森林造成維持費用の推算について ー観光レクリエーション面からの考察ー, 日本林学会九州支部研究論文集29, 27-28
- 柳次郎(1977)森林造成維持費用の推算について(II) ー観光レクリエーション面からの考察ー, 日本林学会九州支部研究論文集30, 9-10
- 柳次郎(1978)自然休養林・自然休養村の基本的考察, 日本林学会九州支部研究論文集31, 7-8
- 柳次郎(1979)自然休養林に関する諸考察, 暖帯林383, 24-31
- 柳次郎(1986)緑環境と森林レクリエーション的利用に関する最近の動向, 山林1221, 54-60
- 柳次郎(1988)緑環境と森林レクリエーション的利用に関する最近の動向, 山林1245, 50-55
- 柳次郎(1988-1)山村観光開発を考える, グリーンエージ179, 8-11
- 柳次郎(1988-2)山村観光開発と環境保全, 林業技術555, 7-11
- 吉田鐵也・川村誠・加藤博之・海老沢秀夫(1981)アーバンフリンジにおける風致林計画 ー京都市双ヶ丘を事例としてー, 京都大学農学部演習林報告53, 116-130
- 油井正昭・石井弘(1985)森林の風致的類型化に関する研究, 造園雑誌48(5), 258-263

Z

- (財)林政総合調査研究所(1995)森林保全・整備方針, 千葉県, 千葉, 261pp
- (財)林政総合調査研究所(1996)林政総研レポートNo.48 経営放棄森林 ー実態と取り組みー, (財)林政総合調査研究所, 東京, 158pp
- (財)自由時間デザイン協会編(2001)レジャー白書2001 ー余暇の意味変化と新たな市場ー, (財)自由時間デザイン協会, 東京, 173pp
- (財)余暇開発センター編(1977)日本人の余暇の現状と将来 ーレジャー白書ー, (財)

余暇開発センター，東京，44pp
(財) 余暇開発センター編(1980)日本の余暇の現状 - レジャー白書'80 -，(財) 余暇開発センター，東京，31pp
(財) 余暇開発センター編(1983)レジャー白書'83 - 生活文化志向を強めるレジャー活動 -，(財) 余暇開発センター，東京，74pp
(財) 余暇開発センター編(1984)レジャー白書'84 - スポーツ・文化活動・アウトドアレクリエーションへと向かう余暇活動，(財) 余暇開発センター，東京，71pp
(財) 余暇開発センター編(1985)レジャー白書'85，(財) 余暇開発センター，東京，95pp
(財) 余暇開発センター編(1986)レジャー白書'86 - レジャーも「女性の時代」 -，(財) 余暇開発センター，東京，106pp
(財) 余暇開発センター編(1987)レジャー白書'87 - 高まるリゾート需要 -，(財) 余暇開発センター，東京，107pp
(財) 余暇開発センター編(1988)レジャー白書'88 - 日本型リゾートライフに向けて -，(財) 余暇開発センター，東京，103pp
(財) 余暇開発センター編(1989)レジャー白書'89 - 完全週休2日時代のレジャー -，(財) 余暇開発センター，東京，99pp
(財) 余暇開発センター編(1990)レジャー白書'90 - 1990年代のレジャー -，(財) 余暇開発センター，東京，101pp
(財) 余暇開発センター編(1991)レジャー白書'91 - 日本のバカンスを考える -，(財) 余暇開発センター，東京，113pp
(財) 余暇開発センター編(1992)レジャー白書'92 - 分散型余暇社会に向けて -，(財) 余暇開発センター，東京，118pp
(財) 余暇開発センター編(1993)レジャー白書'93 - ポスト・バブルのレジャー -，(財) 余暇開発センター，東京，112pp
(財) 余暇開発センター編(1994)レジャー白書'94 - 90年代後半の余暇動向を探る -，(財) 余暇開発センター，東京，110pp
(財) 余暇開発センター編(1995)レジャー白書'95 - 「高齢化」社会の到来と余暇 -，(財) 余暇開発センター，東京，116pp
(財) 余暇開発センター編(1996)レジャー白書'96 - 余暇を活かす -，(財) 余暇開発センター，東京，135pp
(財) 余暇開発センター編(1997)レジャー白書'97 - 連休新時代 -，(財) 余暇開発センター，東京，137pp
(財) 余暇開発センター編(1998)レジャー白書'98 - 少子・高齢化時代における女性の余暇 -，(財) 余暇開発センター，東京，143pp
(財) 余暇開発センター編(1999)レジャー白書'99 - 広がる「社会性余暇」 -，(財) 余暇開発センター，東京，145pp
(財) 余暇開発センター編(2000)レジャー白書2000 - 自由時間をデザインする -，(財) 余暇開発センター，東京，145pp